

第三章 「家」における母の地位と責務

一、「家」の基盤

私たちの人間的生命は、「一方において動物に通じ、一方において神に通ずる」と見るのが穩當でないかと思ひます。動物に通ずる方に肉體があり、神に通ずる方に精神があります。この動物的肉體と神的精神とは、常に統一的に一體化される吸引力があるものなのですが、その何れかに無理があつたり不純がありますと、統一的一體化を拒み分離しようとなります。

で、私たちは出来るだけ、肉體的にも精神的にも無理をなくし不純をなくして、常に統一的一體化の麗はしいもので生きようと思ひます。それが「生活」なのです。

父と母はやはり同じ人間で、同じやうに肉體と精神を持つて、兩者の統一的一體化に生きようとしてゐることは同じなのですが、どちらかといへば、父は精神的に高いものを示し、母は肉體的に高いものを示します。

この父の高い精神性と母の高い肉體性が、また一の統一的一體化の吸引力をもち、一段と高い上位の統一的一體化に生きようと思ひます。それが夫婦の生活なのですが、その統一的一體化の姿が、前にも述べた眞の「親」なのです。で「親」といふのは、一段と高い人間の姿だといつてもいいのです。

この姿の最も眞なるものにおいては、精神的にも肉體的にも全く純一無二に統一され一體化されて、そこに人間的な何物の不純や無理を見せません。全く神化し佛化してゐるといつてもいいと思ひます。人間として最も完全な眞の姿なのです。この姿から生命的な私たちの子どもが生まれます。また物が生産されれば最も生命的なものとなります。だから、「家」を最も生命的なものとする場合は、この姿—境涯から生ませなければなりません。

で、母が肉體的に高いところから、すべての母の性格が導き出されます。まづ母の性格は、情的であり、現実的であり、平和的であり、休養的であり、家庭的であり、宗教的です。したがって、物事に消極性と下向性を持つてゐます。

父の性格はこれと反対で、知的であり、理想的であり、戦闘的であり、活動的であり、社会的であり、科學的です。したがって、物事に積極性と上向性を持つてゐます。

むろん、父と母は同じ人間で、兩者とも肉體と精神は持つてゐるのですから、それ／＼幾分づつかは兩方の性格を持つてゐるのですが、たゞ著しい性格の傾向として、さうした差があるといふまでです。だから、女として男まさりの粗剛な人もあれば、男として女に近い柔軟な人もゐるわけです。だが、一般的な性格の傾向としては、今言つたやうな差があるわけです。またそれがなければ、夫婦構成の吸引力が失はれるわけです。

だが、この性格の差によつて、「男がいゝ」「女が悪い」といふ意味は絶対にありません。私たち人間は、肉體を失つても精神を失つても生きられないのですから、そこに善悪高卑の差は絶対にありません。飽までもそこは持ちつ持たれつ的なものなのです。よいと

いへば兩方がよく、悪いといへば兩方が悪いと言はなければなりません。

だが、こんなことは言はれます。男の出る幕に女が出れば悪く、女の出る幕に男が出れば悪いといふことはいへます。そこに個性的な界線の厳しいものがあつて、その界線を越えれば、越えたものが悪いといふことになります。これは憤まなければならぬことだと思ひます。

で、母の下向性をおしつめて行けば、「大地」に至ります。父の上向性は「太陽」に至ります。「大地と太陽」これが統一的に一體化されれば全宇宙となり、萬物がそのうちに生ひ育ちます。眞の「親」の形體も、こゝに來て愈々はつきり爲されたと思ひます。

まことに長多いことだが、わが皇祖の天照大神は、神話の語るところによれば、女性であつて太陽の御性格があらせられたやうに承ります。だとすれば、天照大神は眞の「大み親」であらせられたことになります。尊くも長き極みです。母の最も理想的なお姿だと拜察します。

で、太陽がなければ何物の生命もないと同じやうに、大地がなければまた何物の生命も

ありません。その「大地」の性格を天稟的に繼承し受容して、生きてゐなされる唯一絶対の生命的な具現者は、母といふことになります。かうなると、母の性格もまことに偉大なりと言はなければなりません。

「大地」は皆さまもご存じのやうに、生きとし生けるものゝ一切を孚み、安らかに眠らせ休養させ、しかも生命の根源たる動力的供給の電源地なのです。だから、「大地」なくては一日も生きられないのが、私たち生命あるものゝ悲しい掟律なのです。すなはち、私たちの日々の食膳にのぼる營養的質料にしましても、身にまとふ衣服的材料にしましても、住居の家屋的材料にしましても、一として「大地」の恩澤によらないものはありません。全く私たち生命者は、「大地」の温かい宏大な懷に抱かれ、この惠澤と恩寵に甘へて生きてるといつてもいゝのです。まことに有難きものは「大地」と言はなければなりません。

だが、それでゐて、また私たち生命者ほど、「大地」を粗末にしてゐるものはないのです。「大地」を踏みじり破壊し、暴戾の限りをつくしてゐます。脚下に踏みじるばかり

か、「大地」を引つくりかへし、川を狭めて溝となし、山をくづして平地となし、湖を埋めて陸地とし、或は陸地を變じて川とし、隧道を通じて汽車を走らすなど、數限りもありません。

だが、「大地」の性格的偉大は、たゞ黙々としてそれ等の恣意と専志にまかせ、また忘恩の咎めたてもせず、全く緘黙と忍従の四字に徹しきつてゐます。「大賢は大愚に似たり」といふ古い言葉もありますが、全く「かくや」と察せられて、その忍従的性格の深さ高きに、私は一の神威さへ感ぜられるのであります。そして心からなる敬念と讃仰のまごころを捧げないわけには行かないのです。

たゞひたすらに、萬物を孕育し生成さすに専念するだけで、他はすべて他の爲すさまに委せ切つてる、界線の道義の高さに、「大地」の性格的偉大さが崇高にも神化されると思ひます。これがそのままお母さま方の性格であると思ふにつけて、再びお母さま方に敬崇のまことを致さないわけには行きません。まことに偉大な性格に生れづいてゐなされると思ひます。

今日、私たち日本種族は、世界的な大飛躍を遂げつゝあるのですが、その飛躍的動力の電源をどこに求むべきでせうか。むろん上御一人の御稜威によることは申すまでもないことですが、私は一に、わが母の大地的性格に深く透徹してた雄健さと偉大さに歸したいと思ひます。

すなはち、第十五代應神天皇の御代に儒教が傳來して、「女ハ幼ニシテ父ニ從ヒ、嫁シテハ夫ニ從ヒ、夫死シテハ子ニ從フ。是ノ故ニ三從ノ義アリ」といつて、三從ノ婦徳を説示すれば、たゞ黙々としてその義に隨順し、實踐し、更に欽明天皇の御代に佛教が渡來して、これまた女子は最も罪業深きものとして、寺堂の門前には「女人禁制」の標柱を建てるといつた露骨さを示さうとも、つゆ反抗の色を見せず、たゞ黙々としてこれに隨順し歸依し、更に武士階級時代においては、「婦女子は齒牙にかくるに足らず」として、人間の埒外におかれ侮蔑されようとも、これまた黙々として忍従し、如何に閨室の狭きに押込められようとも、よく大地的性格の深きに徹し、露ほどの遺恨反噬の色なく、虐げられれば虐げられるまゝに、苛まれれば苛まれるまゝに、たゞひたすらに一家の隆昌と子孫の繁榮

をのみこれ願ひ希求し、身をもつて婦徳の完成と堅持に捧げまつて來た、わが母性的祖先者の雄健と偉大に、今日の大飛躍的動力の電源を求めなければ、他に求めるところがないと思ひます。

これを知的に採算的に考へれば、「母」の性格ほど割の悪い馬鹿げた性格はないと思ひます。亭々と雲表に聳えた大樹を仰ぎ見て、それを禮讃景仰するものがあらうとも、俯して岩石深く喰ひ入つて、その大樹を支へ、その大樹に無限の生長的動力と榮養を與へ、久遠に生命づけてる巨根の存在を思ひ見るものがないことは、樹根にもし功利的な打算心でもあれば、憤懣のあまりその性格を投げ棄てるかも知れないと思ひます。明治の末期から大正にかけて、さうした危機が見られないこともありませんでした。

だが、血液は、如何に功利的な打算性の高い西歐文化といへども、どうしても奪ふことが出来ませんでした。さうした危機的な泡沫を見せたのは、ほんのインテリ的な新しがり屋の一時的な花火遊びに過ぎなかつたのです。大方の母たちは、よくその大地的性格に徹し、かゝる外聞の誹謗や功利的な打算など全く眼中におかず、たゞその性格の完成にいそ

しんで来たのです。

これが今度の大東亞戦争となつて、如何に著大に、前線勇士の上に效驗を見せたことか。前線における如何なる惨苦も辛酸も、また如何なる頑敵をもよく克服し制壓して、善戦敢闘し得る原動力の最大なものは、「母」の力であることを雄辯に物語つてゐるのです。まことに偉大なものは、「母」の大地的性格と言はなければなりません。

また、わが祖先的母性者は、甚だしく宗教に忌み嫌はれながら、甚だしく宗教に歸依し隨順だつたことも、一の特質と見なければなりません。これは「母」自體の宗教的性格からも來てると思ひますが、それにしても極端と思はれるほどに宗教的であり諦觀的でありました。全く忍従と隨順の權化だつたと思ひます。これ宗教的諦觀のよほど高いものでないと、到底なし能ふことではありません。「運命には絶対に抗しない」といふのが、その信條だつたとも思はれます。

この點は、全く人間でありながら、一切の官能を絶し、「大地」そのままを地で行つたやうに思はれます。これは甚だ愚昧なやうに見えて、決して愚昧ではなく、大賢に等しい

ものだと思ひます。天稟的な性格の一極に徹すれば、よしそれが愚昧であらうとも、神化して大賢となるものだと思ひます。たゞ私たちは愚昧を生半解な中途半端に終らせるからで、愚昧も愚昧に徹すれば、必ず佛化され神化されると思ひます。私たちはその姿に頭をさげなければならぬのです。

西洋にはしばしば男女の性格的葛藤や争ひがありましたけれど、日本には絶えてなく、今ほど申しやうに、明治から大正にかけて西歐文化の中毒症から、「女子運動」なるものが發生し選舉權などの獲得に狂奔した時期もありましたけれど、大方の母性的賢明さはその乗するところとならず、一時的な泡沫として消えて行きました。

だが、私とても、今日のお母さま方を、昔の儒教的に「三從」の檻のうちに押込めようなどとは、つゆ考へてゐるものではありません。むしろ女性的・母性的性格の偉大さに跪つき、楠公父子の忠誠よりも、久子夫人の貞節の高きに景仰おかない一人なのです。またさうした時代が漸次來つゝあると思ひます。

男子が眞に男性的・父性的に自覺すればするほど、女性尊重・母性敬護の氣運が、澎湃

佛教の
五山派

として盛々と浮きあがつて来ると思ひます。今までの男子が性格的に蒙昧だつたが故に、計らずもそこに悲劇が演ぜられ、女性が泣き母性が虐げられたのだと思ひます。だが、男子も今日では相當に自覺されつゝあることを、世のお母さま方に一の誇りをもつてお告げしたいと思ひます。

さきほども申したやうに、支那事變から大東亞戦争が勃發して以來、前戦の將兵勇士が事あるごとに、母を招び母をしたひ、母を禮讚し母を景仰し、戦死の今はの際に、「天皇陛下萬歳」を叫ぶ次の息切れに、母を呼ぶ可憐さ、いとしさ、いみぢきさ、涙なくしては感懐し得ないではありませんか。「母」もこの一言によつて、千萬の孝養をつくされたよりも、もつと満足に思ふべきでないかと思ひます。

前言もしたやうに、科學的・物質的・個人主義的な國家文化が衰亡後退を來たし、母性的・宗教的な全體主義的な國家文化が興隆前進を見せつゝある今日では、女性的・母性的性格者の動力的電源を要するや、多大なものであらうと思ひます。お母さま方も大いに頑張つて頂きたいと思ひます。

それは女性者・母性者の偷安逸樂を意味するものと解してはなりません。ます／＼責任の重大を痛感し、いよ／＼性格の明鏡的な顯彰に努力しなければならぬと思ひます。今までよりか一段と高い大地的性格に徹し、その偉大な磁力性を發揮することによつて、他極の男性的・父性的性格の正しき顯彰的示唆と暗示を與へ、偉大な太陽の出現を翹望しなければならぬと思ひます。

物理学はいひます。——「最も偉大なマイナスの電磁は、最も偉大なプラスの電磁を招ぶ」と。これは宇宙大生命がもつ千古不易の鐵則なのです。この偉大な兩電磁の統一的一體化においてこそ、最も偉大な「家」「國家」が成立つのです。

だから、この偉大な「母」の大地的性格の磁力性こそ、「家」を「國家」を千古不易に隆昌と安泰におく、唯一不二の絶對的な基盤なのです。この言を、世のお母さま方に謹んで申しあげたいと思ひます。

二、父と子の鏡かがみ

196

「わが子」が真に「わが子である」事を、肉體的にも精神的にも、いはゆる私たち人間の全量において完全に知つてゐるものは、「母」だけだと思ひます。「母」は「わが子」に對して疑ふ餘地は全然になく、全幅の信頼と信仰をかけ得る頼母しさ強さにあると思ひます。「母」の「わが子」に對する愛の強さは、むろん本能的でもありませんが、「わが子」に對する微量の疑義もない、全幅の信頼と信仰の高さ頼母しさ強さから來てるものでないかと思ひます。ここに何人も企及し得ない、「母」の幸福的な深さ高さの歡悦があると思ひます。

これに反して、「父」は甚だ頼りない淋しい境遇にあると思ひます。「わが子」が「わが子である」の確證を、肉體的・精神的なその何れにも、索め得ない哀れさ淋しさにあり

ます。たゞそれを「わが子である」の信頼と信仰にまで導くものは、母の、父への貞節であり、心からの隨順にあると思ひます。母にこの高き貞節がなく、隨順を缺くならば、父はそれだけ子どもに對する信頼と愛を缺き、子への撫育の度も薄らいで來るものと思ひます。

むろん、父の子に對する愛も本能的なものだと思ひますが、その本能も「わが子である」の信頼があればこそで、その信頼に動搖と稀薄がある以上、如何に本能的なものだといへ、愛の全量を傾倒するわけには行くまいと思ひます。

かういへば、父の愛が甚だ功利的なやうに聞えるかも知れませんが、絶対にさうではなく、母もわが子でない他人の子に、たとへば、先妻の子であつてさへ、わが子と同様に、自分の愛の全量を、その子に注ぎ得ない傾向にあると思ひます。たゞ全幅の愛を注ぎ得るのは、「わが子である」の確信と揺がない信仰があるからだと思ひます。

だから、父の愛をしてその子に全幅に注がしめるには、母は父への高い貞節と隨順のまことを持つてしなければならぬと思ひます。父はそれによつてのみ、「わが子である」の

197

信頼が信仰にまで高められ浄められるのだと思ひます。その他に、自分の肉體的にも精神的にも、深い確證を持つてゐるではありません。一に母の心からなる貞節と高い隨順より外に、頼るべき何物もないのです。

だから、父の子への信頼と信仰を、奈落の谷底におとさうと思へば、母にいくらでも打つ手はあると思ひます。

「あなた！」

「何だ！」

「あなたは壽一を自分の子だと思ひか知れませんが、實は……」

と、よしうそ事でも眞實らしく告白してこらんなさいませ。夫―父はきつと眞蒼な顔となるに違ひありません。もしそれが眞の眞實だつたらそれきり破綻だと思ひます。

たゞ一片の世評の噂によつてさへ、妻―母を疑ひ猜疑するほど、夫―父の信頼・信仰といふものは、薄弱至極な基盤に立つてゐるものなのです。わけて貞節が低く隨順が薄ければ、世評に拍車をかけるやうなもので、如何に辯明これ努めるとも、夫―父には何等の反

證ともならないのです。ますく疑感を深めるよすがとならうとも、釋明のあかしとはならないのです。

むろん、一度や二度の反抗や不始末で、妻―母を疑ふ父ではないでせうけれど、しかしそれだけ父が子への愛を氣拙くすることだけは事實だと思ひます。母もしばく父への不満を子に移すといつた傾向があるのと同じやうに、父もまたさうした傾向があるものと思はねばなりません。

むろん、夫―父への親愛と貞節は、子のあるなしに係らず盡すべきものですけれど、わけて子があれば、子を愛するが故に、夫―父へ親愛と貞節は、その度を増さなければならぬと思ひます。

次に、「子」なのですが、「子」もまた父と同じやうに、肉體的にも精神的にも、その確證がないわけです。母は今言つたやうに、全く疑ふ餘地なく精神的にも肉體的にも全幅の確證がありますから、全量的な眞身の愛をもつて、「子」を哺育し撫育します。その眞劔的な愛と態度によつて、「子」もまた血液的に照應し目ざめて來ると申しませうか、母

の愛や態度に比例して、「母である」の信頼を得、全く疑ふ餘地がない信仰にまで高められるのだと思ひます。どんなに亂暴に打つても叩いても、母を疑ふ眞の「子」はないだらうと思ひます。

だが、^{まご}繼子によくそれがあつるのは、周囲の境遇的事情にもよりませうが、やはり母の心のうちに不純なもの、「わが子でない」の疎隔があるために、同じ叱り方・叩き方にして、一方には親愛的な温かい血がかよひ、一方には憎しみの毒素がはいるのでと思ひます。その毒素が幼な心にも感應し、「さては眞の母でないのか知ら」と、疑ふ心にもなるのだと思ひます。

いつかの雑誌「婦人公論」かに「子は血ならず」といふ小説を見ましたが、全くさういふ譯には行かず、やはり血縁の尊さはあると思ひますが、或點までは、母の精神的修養によつて、愛の淨化をはかり眞の「母である」の高い信念にまで達すれば、「子は血ならず」ともいへると思ひます。だが、それはなか／＼に普通の凡人では出来がたいことだと思ひます。

やはり眞の「子」であることが尊く、さう大した苦勞なしに本能的に——（本能ほど生活に易いものはなく、また強いものはありません）——子を「子」たらしめることが出来ると思ひます。この「子」は自分の腹を痛めた子であることが、如何に母にとつて嬉しいことか、想像に餘るものがあると思ひます。

それでこそ、晝夜わかつず子育ての世話も出来、勞苦も忘られるのだと思ひます。叩いても打つても、わが子はわが子で、「わが子である」の固い信念には微動たもしないのだと思ひます。この固い信念が子どもへの一切のものに、温かい母の血をかよはせ、涙を通すのだと思はれます。母を疑ふ眞の「子」はないわけです。

だが、絶対にないものと迷信してはなりません。「子も母である」の確證はないのですから、たゞ一に母の眞身の愛によつて、「子」はさう信仰にまで高められるだけです。母の愛が激減して殘忍となり冷酷となるならば、またそれがふだんの常體となるならば、母を疑ふの餘地は十分に出来て來ます。

「母の仕打は餘りにひどい。さては繼母で眞の母ではないのかな」と疑惑をさしはさむ

餘地は十分に生じて來ます。注意しなければなりません。夫—父を「わが子でない」の奈落の谷底におとし得たと同じやうに、子どもを「わが母でない」の深淵におとし込むことも、母にとつてはさう難儀なことでないと思ひます。

だから、母は眞の「母」に自覺し、出来るだけ純愛の温かいものを子どもに示し、子どもから眞に「母である」の信頼と信仰を、得なければならぬと思ひます。それが夫—父への忠貞でもあるのです。

更に、子は父となると、母よりもずつと遠い距離において見ます。むしろ父の愛にもよりませうけれど、その父の愛も前言ったやうに、父自身の直接的なものでなく、母への信頼をとほしての間接的なものですから、母の愛の直接的なものに比して、さう感銘深いものではないと思ひます。

たゞその感銘を「わが父である」の高い信頼と信仰にまで導き高めるものは、やはり母が父への貞節と隨順の赤心だと思ひます。この母の高い貞節と赤心によつて、初めて子は「わが父である」の信頼を高め、それが疑ふ餘地のない信仰にまで深められるのだと思ひ

ます。

だから、母の父への貞節と隨順は、夫—父への高き道義であると同時に、父が子への信仰と、子が父への信仰を併せ得さしめる紐帶的な餘だと思ひます。母の「家」における地位と責務も、また極めて重大だと言はなければなりません。

で、一家は母の大地的性格の基盤の上に立ち、この餘によつ愈々強固に紐帶され、何物にも揺ぎない宏壯な建築となるわけです。しかも、この餘は母の心掛け一つによつて、「家」の内外どこにでも打つことが出來ます。まづ「家」の内にこれを求めれば、祖父母への孝養、祖先への奉祭にしても、「母」がまづこれを行へば、「子」は必ずこれに隨ひます。婢僕への慈しみにしても、「母」がこれを行へば、「子」は必ずこれに隨ひます。

これ子どもは、母を神のやうに信仰し、母の行くところ必ず行くべきものだと思ひ、また母の行くところ何ら危難がないものと信仰してゐるからです。それは雛つ子が母鶏の行くところ、必ず隨從するのとちつとも違つてゐません。全く意識を超えた本能的なものかも知れません。それほど母への信仰が高いものと思はなければなりません。

これをうるさいなどと拒んではなりません。拒んでは母への信仰を阻害するばかりか、子どもへの教育とはならないのです。子どもは母への信仰によつてのみ生長し大きくなるのです。教育の根底はそこにあるものと思はなければなりません。

次に、「家」の外でこれを求めれば、まづ隣人への交際です。母が親切に懇意に交際すれば、子もまた親切に懇意に交際します。母がこれに反対だと、子もまた同様に母の通りにします。

それから姻戚親類への交際も同じことです。母が生み親に孝養怠りなければ、子もまた同様に里への孝養を怠りません。粗略にすれば、粗略にします。

物を大切にしないも同様です。母が粗末にすれば、子もまた粗末にします。犬・猫への可愛がりも同様です。母が虐待すれば、子もまた虐待します。草木を愛するも愛しないも同様です。

「子によつて母を知る」ともいはれ「母によつて子を知る」とも言はれるのがそこです。それほど母が子に信仰されてることを、深く自覚してゐなければなりません。これを思へ

ば、母も軽々しく舉措進退をなせないことになります。子どものためにうんと修養していただきたいものです。

三、女 味

諺に「人を見たら敵と思へ」といふ言葉がありますが、いつの時代からさう言はれたものか、まことに歎はしい言葉だと思ひます。が、しかし、或社會的な心理をうがつてるところをどうすることも出来ないと思ひます。「家」を一步外に出れば、敵ほどの厳しいものでなくても、何かそこに疎隔がましい寒々したものが、道行く人の間に吹き流れてると思ひます。

會社・銀行・官衙・學校・工場などの職場に行きましても、上位の厳しい監督の眼が光り、母の温かい眞身の愛のほとぼりもないやうです。むろん職場は活動の場であつて、

休養の温かいほてりなどない筈だと思ひますけれど、それでも餘りにも荒れすさんだ素漠とした光景だと思ひます。そこに一日働いてゐては、骨の髄までも温味・うる、味といったものを吸ひとられてしまつて、枯木も同然なカラ／＼としたものになると思ひます。

むろん、「活動即休養」といつた至上涯があるのですけれど、それはよほど修養の出来た人でないと、味握されない高根の月なのですから、私たち普通の凡人には望まれさうもありません。

また、お互に申しあはせて、もつと職場に温味うる味を持ち來たせばいゝと思ひますけれど、それは働く能率が下がると小乘的に考へられて、實際は數倍の能率をあげる所以なのだと思ひますけれど、一見能率が下がるやうに見えるものですから、さう易々と申合はせもなく、また實行されてもゐないやうです。

私にいはせれば、職場の種別は何であらうとも、生産は一の藝術だと思ひます。だから如何なる生産も歡喜的なもので、歡び勇んで生産出來るやうに、職場が設備されてゐなければならぬと思ひます。今日のところでは、まだ／＼厭々やつてるやうな状況ですから

たつ時間も遅々と感ぜられ、疲れることも多大だらうと思ひます。

そして心の餘裕がありませんから、周囲の殺風景も氣にならず、仕事が徒らに馬車馬的になつてゐるのだと思ひます。生産科學が資本主義・功利主義一天ばりに傀儡されて、純眞無垢の眞の科學的一極にも徹しきらず、さりとて宗教的な他極に歩みよりもせず、中途半端なところに行きつ戻りつしてゐるのです。いはゞ今までの科學主義文化の茶毒が、まだ眞に掃拭されてゐないのです。

だから、主人をさうした今日の職場に送つてゐなされる女性の方は、深く思ひをこゝに致し、主人が日暮れて「家」にかへるときは、もう枯れに枯れきつて、人間の枯木がかへるものと思つてゐなければなりません。

だから、「夫—父への道」のところでも言つたと思ひますが、夫—父への好きなど馳走準備も事缺いてはなりません、と同時に、精神的な柔やかなご馳走として、女味・うる味の準備も絶対に事缺いてはなりません。

何といつても、「家」は休養の場ですから、休養に事缺いては嘘であり、「家」として

の存在意義を大半失ふものと思はなければなりません。それは門の入口第一歩から休養が始まりますから、手落なく整へておかなければなりません。そして女味・うる味・温味といつた休養の泉が、「家」のどこからでも滾々と湧き出るやうになれば、まあ申分ないものだと思います。

またお母さまの體からも心からも、言葉や行爲の端々からも、にほひこぼれるやうになれば、嬉しいことだと思います。それは大變なことのやうに思ひますけれど、そこは一つ「家」のため、大きく言つて「國家」のために努力していただきたいと思ひます。「生産の増強」などといつて、どんなに騒いだところで、この根本を忘れて生産の増強は、絶対にないものと思はなければなりません。

職場において疲れきつた身體と精神を、「家」にかへつても癒されないとすれば、私たちはどこか他所で、これを癒さなければならぬことになります。この費用は物質的にも精神的にも大變なものだと思います。職場で少々ぐらゐの能率をあげたところで、何にもならないと思ひます。

工場などの經營者もこの邊を少々考へて、職場に苛烈な能率一天ばりの眼ばかりを光らせないで、今少し温かいうる味のある人間血の通つた設備などして、楽しみ愉快に仕事が出来るやうに爲さなければならぬと思ひます。その方が却て能率が上がるのです。

餘りに今日のやり方は人間を能率一天ばりに虐げすぎてると思ひます。それは一時的に効果的かも知れませんが、長時間的には絶対に能率が上がるものではありません。人間を機械化するよりも、「人間を眞の人間にした方がより能率的だ」といふことを、知らない暗愚から來るものなのです。今までの科學はその暗愚の囚人だつたのです。

何といつても、人間が機械をつくり、物をつくるのですから、人間が第一とならなければ、生産増強もたゞ掛け聲ばかりに終るのです。よし一日や二日の短期ならば機械のやうに頑張り通すかも知れませんが、期限のない長期になりますと、よほど人間といふものを考へないと、あたらしい資源を涸渇さすことになると思ひます。機械は短期で造られますが、人間は二十年以上を要するものと思はなければなりません。それも生れてからのことですが、その「生む」ことが神のみ力を借らねばならぬのですから、「おい、それ」と機

械のやうに簡単に行くと思つては的が外れます。

人間は十時間働けば、必ずそれに値するだけの肉體的・精神的休養を要求し、十時間休養すれば、またそれに値するだけの肉體的・精神的活動をやるものなのです。必ずそこは平衡と統一に動きます。だから、休養をやらせて損だと思ふのは、まだ人間のこの本性を知らないものなのです。

物の考へ方には、もつと視野を大きく廣くして考へなければならぬと思ひます。職場において、人間が機械と同じやうに虐使され最大限の能率をあげたところで、それは職場主として採算の上々なるものかも知れませんが、しかし、職場に働くものにとつては、全く採算の取れない馬鹿げたこととなります。少々ぐらゐ職場で儲けたところで、酒場や料理屋で湯水のやうに使つてしまへば、結局は採算の採れないことになるのです。少くも職場で儲けた金は自分の身について、餘裕があれば貯蓄債券か國債でも買へるやうにならなければ嘘だと思ひます。

「お前たちの生活はどうでもいゝ。職場の能率と成績があがればいゝ」といつた遣り方

考へ方こそ、個人主義・資本主義といふのだと思ひます。

何も私は、この緊迫せる時局下に、能率の低下を主張しようとはつゆ思ひません。むしろ、能率を最大限に歡喜的に上昇せしめようと願ふ、高い念慮から主張してゐるまでのことで、盟邦獨逸では「歡喜力行」を標語とし大にやつてゐるといふではありませんか。それが生産能率を最大限に上昇せしめるものだと思ひます。

だが、それには、たゞ單に能率一天ばりでなく、もつと「人間」を生かさなければなりません。「人間」を生かすとは、今日の男性一面的な尖々しい職場に、女味・うる味・温味といつたものを、精神的方面からも肉體的方面からも多量に持ち込んで、職場を「活動の場」とすると同時に、「休養の場」とすることだと思ひます。いはゆる完全な「家」とすることです。

「活動即休養」の至土境が持ち來されれば、最も理想的で申分ないのですが、よしそれが出來ないでも、別々でもいゝ多量に兩者が準備される事が肝要だと思ひます。すると、人間が眞の「人間」となり、生々として來ます。能率百パーセントなること請合ひです。

それには先づ、法治國的な権利・義務の雇傭關係なども廢して、全く純な人間關係の道義の上に立ち、「親」が「子」を愛するやうにしなければならぬと思ひます。「子」はまた「親」を敬し、兩者が統一的に渾然と一體化し、國家的な一職能の上に立ち、生産増強に精進しなければならぬと思ひます。——（これはまた後で述べます）——

だが、今日の職場が「活動の場」であると同時に「休養の場」となるまでには、相當遠距離的な時日を要することと思ひますから、當分のところ、「家」において休養の道を求めなければならぬと思ひます。これお母さま方に、「家」の休養的整備が完全ならんことをお願ひする所以なのです。

しかし、氣運がたしかに來つゝあることを申しあげたいと思ひます。この間、横濱に用件があつて、新橋驛へ出かけたのですが、何氣なくプラットにのぼり乗客待合室にはいつたのです。ところが驚いたことには、未だかつてそんなことなかつた待合室に、生々と今生けたばかりの草花が、赤・黄・白と、ほづてるではありませんか。そして殺風景な部屋全たいの空氣を、何ともいへぬ柔やかな人間のなものにしてるのです。私はほろ／＼と

涙が出さうになりました。新橋驛も見上げたものと思ひ、足もとのプラットの凝土にも温かい人間血が通つてゐはせぬかと思直しました。

これでこそ、殺人的な交通地獄も救はれるのだと思ひました。どんなにラジオの擴聲機でかん高く呼んだところで、人間行爲の原動力である感情が焼けてる以上、何にもならなうと思ひます。他を押のけ競りあつて乗車しようとする客たちには、もう耳がないのです。耳のないものに擴聲機を向けたところで無駄なのです。それよりも道は遠いやうだが眼に訴へた方が却て結果が近いのです。そこに新橋驛の卓見があるわけです。

何にしても人間行爲の原動力である感情を柔げ落つかせ、眞の人間的な姿にかへす方が根本だと思ひます。それには驛全たいに不足し缺けてゐる女味・うる味・温味といったものを、多量に持ち來たすより外ないのです。乗客待合室に一鉢の花をおくことは、事瑣細のやうで決して瑣細でないと思ひます。

お互の私たちの行爲も、一片の福よかな花として咲き出れば、どんなに嬉しいか知れないと思ひますけれど、餘りに今の人たちの行爲は焼けすぎてると思ひます。残念なこと

す。

次に、お母さまも職場に行つてゐなされば、お母さまも枯れておかへりになるわけです。かうなると大變なことになるやうですが、そこは夫―父の十分な理解を買ふより外ないと思ひます。お互に勵ましあつて、出来るだけの休養をはかるべきです。夫―父も妻―母に職場を持たせながら、さう自分ばかり勝手なことも言つてゐられないと思ひます。

「心氣轉換」といつて異つた仕事をなす事は休養となるものですから、夫―父もさうした意味で、臺所に立つことも決して悪くないと思ひます。それは絶対に夫の權威をおとすものでなく、自分の休養となるばかりか、どれほどまた妻が感激して休養となるか知れないのです。さう人生を狭く考へないで廣やかに大きくのう／＼とやるのが肝要です。さすれば職場の疲れも少いでせうし、「家」にかへつても休養の量が大きいと思ひます。

次に、子どもにしても同様なのです。外の遊びはお腹もへり、相とう疲れるものなのです。わけて今の學校と來ては、職場も同じことですから、大變な疲れと思はなければなりません。今の學校は一日中子どもを叱り通しといつてもいいのですから、子どもにとつて

は大變な仕事なのです。受持が女の先生だからといつて決して安心してはいけません。女の先生も學校では男性一面の緊張と活動に身を削つてゐなさるのですから、女性特有のうる味・溫味といつたものは微塵もないのです。いはゞ自分自身を大變に虐げてゐなさるわけです。まことに同情すべきなのですが、子どもには却て男の先生よりも、ヒス的かも知れません。だから、子どもには一さう氣をつけないければならぬのです。

子どもが「家」にかへる一町ほども前方から、「お母さん」と叫んで來る心根はいちらしいと思ひますが、それほど「母」に枯れてるのだと思ひ、同情してやらなければなりません。そんな状態でかへつて來ますから、もしお母さんが留守でゐなさらないと、大抵の子どもは「わー」と泣くのです。それは相當の年齢に達してゐても同じことです。泣かないでも心のうちは泣くほどの淋しさであることを思はなければなりません。

「家」が沙漠のやうに荒れて取亂れ、そこにちつとの女味・うる味・溫味もないといふことは、つまり母がゐても「母」がゐないといふ結果になるのですから、一家のものがすべて「母」のゐない淋しさに泣くといふことになるのです。氣をつけて頂きたいと思ひ

ます。

四、「家長」への裏づけ

「家長」は、前にも申しましたやうに、一家の統一者として神格的な高き地位にあるのですから、神聖にして犯すべからざるものと考へなければなりません。しかし「父」は、有待の身で時に不明不徳の行爲があるものと、母は十分に理解し心得てゐなければなりません。何もそれは「父」をさげしむ意味でなく、父をして益よりよき「父」たらしめよう赤誠から來るものなのです。だから、父の不明不徳から來る責任の一半は母も負ひ、出來るだけ、さうした不明不徳は避けしめることに努力しなければなりません。そこに母の輔佐、「家長」への裏づけ、家族との間の取なしが必要とされます。そこには、不斷からの修養と心掛けが必要で、父をして眞に神格者たらしめるには、む

るん父自身の修養・心掛けも必要ですが、母としてもそれに無關心であつてはなりません。お互に激勵しあひ、何物にもこだわらない明透な神のごとき心境を開拓するに努力しなければなりません。

「偷言汗のごとし」で「家長」が一ど出した言ひつけ命令を、如何に不徳不明だからといつて、さう猫の目のやうに度々も變へてゐられません。朝令暮改では「家」が治まらなくなるのです。だから、多少の無理があつても、「家長」の權威において押通さねばならぬ場合も、度々はあらうと思ひます。

だが、無理を通すことは、如何なる場合にもあつてはならぬのですけれど、時の勢といふものがあつて、さうしなければならぬ場合もあるのです。だから、さうした場合、母は兩者の間をよく取なして、事が圓滿に治まるやう取計らうべきだと思ひます。

むろん、子どもが幼少なうちは、さうした問題もありませんでせうけれど、子どもが大きくなつて、子どもながらにも獨立した意見や思想・感情を持つて來るころになりますとさうした問題にぶつかることも、屢々はあらうと察せられます。

そこは、父の身にもなり、「子」の身にもなつて、両者が完全に一體化されるやう取計はなければなりません。

もと／＼「父」と「子」は一體化であるべきなのに意見が違つて來るといふことは、すでに「家」の營み方に、どこか落度があつたものと見なければなりませんから、その原因たるやよほど遠いのでないかと思はれます。だから、その遠い原因から改めなければ、完全な一體化が遂げられないかも知れません。絶えず「母」はその邊の空氣を推知して、事が未前に防がれることが肝要かと思ひます。

今日、翼賛會などが言つてゐる「上意下達、下情上通」のことですが、一家における母として、この役割は最も適役と思ひますから、絶えず、「家長」の意を「子」に下達し、「子」の情を「家長」に上通することは、何よりも大切なことだと思ひます。

「父」の意見がむろん「家長」の意見となることが多いのですが、しかし「家長」は屢々言つたやうに、すべてに萬能的な神位にあるのでから、「父」の不明・不徳をもつて「家長」の神聖を汚すべきでないと思ひます。そこに嚴然たる名分があるべきだと考へます。

だから、「父」は自分の意見を「家長」の意見にまでのぼせる場合、一切の私心的な醜い雜物は除き去つて、神のやうに透きとほつた清らかな意見に爲さねばならぬのです。もし考へにまちがひがあつたり、手落があつたりした場合は、すべからず「父」の位置にさがつて心から懺悔しなければなりません。そこは敬虔であつて神を恐れた慎ましい態度がないと、却て「子」の反抗をあふるのです。

だが、その態度があると、「子」もまた深い反省に導かれて、却て柔やかな感情がその間に誘發され、圓滿な一體化が遂げられる場合もあるのですから、たゞ一途な權柄づくで押しても、事が不成功に終はるものと思はなければなりません。

その間の取なしを、最善の配慮と心くばりによつて、うまくやるのが、母に負はされた「家長」への裏づけでもあるのです。

五、教 育

私たち人間は機械をつくり、物をつくりまします。機械は自分で物をつくるのではなく、私たち人間の手が物をつくるのです。機械はたゞ私たち人間の手の、物的延長であるに過ぎないのです。

だから、生産の増強をはかるためには、まづ私たち人間をつくり、次に私たち人間の手の、物的延長である機械をつくらなければなりません。「人間をつくる」といふ根本を粗略にしては、生産の増強もその目的を完全に達することが出来ないのです。

「國家」の高度的な防衛もまた、その根本は私たち人間の育成にあると言はなければなりません。戦車・飛行機・銃砲・戦艦・航母・潜水艦等の物的裝備は、みな私たち人間の、昔でいへば甲冑なのです。私たち人間なくば、如何にそれ等の精強な裝備も、何の役にも

立たないものなのです。米英などはそれ等の裝備的多量と精強を誇つてゐるやうですけれど、それはこけ威しといふやつで、唯それだけで戦争を勝利に導かうなどと思つては、その愚や笑ふに堪へたりと言はなければなりません。

次に、文化方面の生産も同様なのです。すべて私たち人間の生産なのですから、私たち人間を抜きにしては何事も何物もないのです。私たち人間が一切の基本となり基盤となつて、發展し生産し多々益々増強するのです。この人間を生産し加工し教育するのが、お母さま方に課せられた、「家」的・「國家」的責務なのです。その責務やまことに重大と言はなければなりません。

で、まづお母さま方は、「子」を産まなければなりません。「子」をうまないでは、絶對に母たることが出来ません。だから、是が非とも「子」をうまなければなりません。それも數多くうめばうむほど、またその質が優良であればあるほど、母の存在的光輝と榮譽は増します。

この「母」の存在的光輝と榮譽の大は、一家隆昌の金字塔であるばかりでなく、國家の

盛運的發展的な象徴なのです。出産率が死亡率より二倍・三倍・四倍と、數的に倍加されることは、國家の何物にも代へがたい大切なことなのです。だから、多産系の「母」こそ國寶ものです。お母さま方は絶対に「子」を數多く産まなければなりません。

明治の文豪的異材の小泉八雲氏は、次のやうなことを彼の著書で言つてゐます。

「肉體は野蠻人であれ、頭腦は文明人であれ。贅澤華美をすて、質素簡朴を愛せよ。これ日本を偉大ならしめ、東洋に覇たる所以なり」と——（八雲氏は敵——英國人なのですが、日本の精神文化にほれ込んで歸化した人です）——

明治時代の言葉ですから、今日の私たちにピンと來ないところもありますけれど、その言つてることだけは、今日の時代をすでに明治時代において、見抜いてるやうで卓見だと思ひます。

まづ、「肉體は野蠻人であれ」ですが、言葉は少々亂暴ですけれど、肉體は野蠻人的に頑健である方がいゝと思ひます。如何なる辛酸困苦にも堪へ、如何なる寒熱にもめげず、如何なる食物でもよく食はれ、如何なる所にもよく住まはれる野蠻的な、頑強鐵石のやう

な肉體は、絶対に必要だと思ひます。

それにはまづ、「母」の肉體が野蠻人的に頑強でなければなりません。むろん、「父」も野蠻人的に頑強でなければなりません。殊に「母」はその必要が大だと思ひます。そして「父」の弱さをも「母」の強さで補ふ方がいゝと思ひます。

肉體が蒲柳で脆弱では、今日のやうな大東亞、いや、行く／＼は全世界を舞臺として活躍しなければならぬと思ひますが、さうした盛運の到來したときに、間にあはず役立たないと思ひます。そこは是が非であらうとも、野蠻人的に如何なる激職にも、如何なる粗食・寒熱にも堪へうる頑強無比な肉體が絶対に必要だと思ひます。

次に、「頭腦は文明人であれ」では力弱いやうですが、明治時代の言葉としてこれ以上の言葉がなかつたのでせう。それを今日の言葉で解釋して、頭腦は絶対に明晰優秀で物判りがよく、獨創力に富み、道義心に高く篤く、「何をさせてもよく出来る」といつた實踐力・実行力の高く強いものがいゝと思ひます。

肉體的に頑強なことは、單にそれだけでも脆弱なよりも數倍優つてると思ひますが、更

にその上に頭脳が優秀無比であることは、「鬼に金棒」の天下無敵な体制だと思ひます。この無敵体制は今日の日本において絶対必要だと思ひます。

それも今までのやうに、頭脳ばかりが科學的に冴えて実行力・実践力の薄弱なものも困りますが、そこは身的頑強に物を言はせて、優秀な頭脳の命ずるまゝに実行・実践するといふことになれば、正に絶対不敗の體制となると思ひます。

だから、百藝に長じ千藝に傑出する大英材的な人物の輩出は、大に希望し大に歓迎するところですが、出来得べくんば、さうした大人物の陸續的な輩出を翹望して止みません。だが、それは千人にひとり、萬人にひとりでは不可能とあらば、少くも一二藝に長じ傑出した人物が、雲霞のごとく續出してほしいものです。これならば萬人に可能だと思ひます。

苟も、この世に生れ出た以上、生きるに値する何かの一藝に長じないものはない筈ですから、それをよく見抜いて孚み育て、鍊成し、何物も企及し得ない傑出した稜線にまで、生長發展させてやりたいものです。

子どもには、早稲ぶとりもあり、晩稲ぶとりもあり、時には馬鹿にも見え、魯鈍にも見

えるものです。だが、そんなことに神經質的にこだわつてゐては大人物にはなれません。

チーツと辛抱してそれ等を觀察し、その「子」だけに天から特に授かつた天稟は何であるかを、まづ見抜かなければなりません。そしてその孚育と鍊成と發展に、教育の主力を注ぐべきだと思ひます。いはゞ圓滿具足的など、栗のやうな小人物を作るよりも、他にすばぬいで傑出した偉大な片わ——部分品を作つて、國家に奉獻することです。

國家はどん、栗のやうな小人物よりも、偉大に傑出した部分品を組織的に組みあはせ、更に偉大な一の綜合力として、國力を發展さす方が、より效果的なのです。たゞこゝに注意すべきは、その部分品が部分品として完全無缺に出来てゐなければなりません。

しかも、偉大な部分品ほど協力的で組織的なものはないのです。彼——部分品は殆んど生命的といつていゝほどに、他との協力を欲し組織を翹望するのです。今日、一億のわが國民が容易に協力せず組織化されないのは、國民の各自において、唇齒輔車の部分品的自覺に目ざめないが故です。皆一人よがりのち、つぼけを完全さに満足してゐるのです。正にどん、栗的に小さくまろく出来てゐるのです。

それでは絶対に大をなさないと思ひます。よろしく一億の國民は、それ／＼天稟の部分的な偉大に自覺し目ざめ、唇齒輔車的に協力し組織化し、一大猛牛のごとき戦車となつて、結集の總力を一途に向ける方が、部分品としても最も偉大な貢獻を、全一國家に捧げてるわけなのです。

さきの百藝に長じ千藝に傑出するといつた大英才的な人物も、何れの部分品としても調法に役立つから尊いのです。だが、さうした人物は、得てして他との協力を缺き組織化を拒みます。だから、他の何れにも役立たない、唯一つにだけに役立つ眞の部分品こそ、最も協力的であり組織的である筈です。今日の國家としては、むしろ後者を熱望してゐることを知らなければなりません。

で、「肉體的頑強と精神的優秀を併有し、質素簡朴の生活においてのみ、日本は偉大となり、東洋に覇たるが出来る」と、小泉氏が遠く明治時代において見抜いたのであります。まことに卓見だと思ひます。その時代が今日、現實に持ち來たされつゝあるのです。

子どもの教育には、色々注意すべきことがありませうが、大たい小泉氏の言を本幹として進むべきだと思ひます。一、肉體の頑健、二、精神の優秀、三、質素簡朴の生活、この三つです。

日本の統計によりますと、相とう乳幼児の死亡率が高いやうです。これは甚だ残念なことだと思ひます。そこに母として何等かの手落があるのでないか。いはゞ哺乳の仕方、孕育の方法などに、至らぬ點があるのではないかと思ひます。乳幼児は母乳によることが、天然的で理想的だと思ひますが、人工乳にしましても、母乳に近い濃度と榮養あるものとして、哺給することが肝要だと思ひます。さういつた點に氣づかない大きな手落があるのでないかと察せられます。何にしても、生れたものを死なすことは、諦められない残念なことです。

それから、子どもに過食させることも大に慎むべきで、小食よりも過食で失敗するところが多いと思ひます。次は、厚着です。これも害あつて益ないもので、むしろ裸かに近い自然なものがないのではなにかと思ひます。人間の考へたち、つぼけな法則・規定よりも、自然の大法則、大規定にしたがつて、子どもを育てた方が、きつと成功すると思ひます。

肉體的な方面の教育は、一も自然、二も自然で、そこは小泉氏の野蠻に近い方がいゝのではないかと思ひます。それがやがて鍛へ上げの錬成にまで行かなければならぬのですから、出發點が不自然の脆弱では、錬成の大目的も達せられないと思ひます。

それから、季節々々の變り目に來る底冷えといふ奴ですが、これは大人でも相當にこたへますから、子どもも同じだらうと思ひます。よほど注意してやらないと、取りかへしのつかないんだ、失敗を見ることがあると思ひます。お母さまは季節々々の變り目を敏感に受けとつて、子どものために適切な手落ない處置をとるべきだと思ひます。

次に、偏食も問題となると思ひますが、これも野蠻性を發揮して、何でも喜んで食へるやうに慣習づけることが大切だと思ひます。

「早起きは三文の得あり」といふ諺がありますが、どこから勘定した言葉か知りませんが、たしかに健康上いゝことだけは、三文の得以上だと思ひます。「早寝早起」は子どもの習慣上においても、いゝことだと思ひます。

かうして肉體の頑健性を企圖するのも、究極は優秀な精神の實踐的な基盤となさうとす

るのですから、それを失念してはなりません。しかし、精神も肉體の頑健性と並行することが肝要だと思ひます。肉體が脆弱であるのに、精神ばかりが優秀で鋭感性が高いと、神経質となり過敏となつて大成はしません。いはゆる肉體と精神が統一的な平衡性を失ふからです。そこは飽きでも兩者の平衡と統一で、教育の量度を進めて行かなければなりません。

だから、大器晩成を目標として、肉體の健康性を一進めて精神の優秀性を一進め、肉體の健康性を二進めて精神の優秀性を二進めるといつた考へ方が、手落ないいゝ方法だと思ひます。

「急げば廻れ」といふ諺をよく服膺して、精神の優秀を欲すれば欲する程、肉體を廻ることが大切だと思ひます。子どもの出來が悪かつたり、勉強しなかつたり、氣がひがんで素直でなかつたりする大方の原因は、肉體的な故障―不健康にあるのです。學校の先生に彼これ願ひするよりも、お醫者さんに診て貰つた方が早道なのです。だから、飽きでも肉體第一、精神第二と考へなされる方がいゝと思ひます。

次に、精神方面の教育ですが、これは飽までも「子どもの自力で伸びる」といふことを、根本方針としなければなりません。

たとへば、積木にしましても、子どもが自分の力で積むやうにし、母が積んでやつてはならないのです。むしろ示範することはいふことですが、示範したら必ず子どもに、今一度自分で積ませなければなりません。積み得なかつたら何度でも示範し、何度でも積みせ、それが子どもの眞の自力で積みうるまで、根氣よくやらせることが肝要です。

さうした間に、いつとはなしに幼少なころから、「注意力の集中・忍耐力の持続、工夫創造、完成の喜び」といつたものを芽生えさせ、培ひ、味はせ、錬成して行くのです。それを面倒だからといって、母親が積んでやり子どもを満足させるやうでは、さうした精神方面の錬成が出来ないばかりか、子どもに依頼心を起させたり、根氣力をなくしてしまふのです。

蟬や蜻蛉とんぼを捕る場合でも同じです。母親が捕つてやつて子どもを喜ばせてるやうでは、いつまでたつても子どもは進歩しません。飽までも指導の手をつくして、子どもが自力で

捕れるやうにしてやらねばなりません。

蟬や蜻蛉を捕へるには、蟬や蜻蛉の習性的虚をねらふ方が、よく捕れるのですから、それを研究させてうまく捕れるやうに指導しなければなりません。それは動植物の習性的興味に芽生えさせ、科學的創造心の端緒ともなるのです。

習性的虚とは、これを蜻蛉でいへば、蜻蛉の眼は複眼ですから、大體において四方八方が見える筈ですが、見えないところが一ところあるのです。それは後方の尾端から下が見えない——それが虚なのです。その虚をうかどへばうまく捕れるわけです。靜かに近よつて、下からそつと手をやり尻つぽを捕まへるのです。きつと捕れます。

だが、翅をおろして飛ぶ姿勢をとつたら、彼に見つけられたのですから、絶対に駄目です。まだ飛ぶ姿勢をとらない前に、翅をピンと張つてるうちに、その虚をおそはなければ駄目です。

蟬は鳴いてる最中が、おそふ虚なのです。鳴きやんだら殆んど捕れません。蟬の眼も複眼ですが、さう蜻蛉のやうに伶俐ではないやうです。鳴いてる最中だつたら、大抵は捕れ

ます。

蟲類を捕へるのに、さうした習性的虚を子どもに研究させることが、捕へるのに面白味がわき、科學的研究心なども發達して、一舉兩得だと思ひます。

木登りや一本橋渡りなども、きはめて大切なことですから、怪我のないやうに注意して完全に登り渡り出来るやうに指導してやるべきだと思ひます。それは主として、肉體と精神の合一的鍊成に大へん役立つのです。むつかしい言葉でいへば、「精神統一」の鍊成なのです。

近所のお友達とあそぶ場合にも、遊びを最も面白く愉快にするために、そこに色々な倫理的なこと、たとへば、「仲よくする」とか「譲りあふ」とか「助けあふ」とか「親切」とか、「お互に謝忍して許しあふ」とか、色々さうした機會と材料が出て來ると思ひますから、それをよく指導してやらなければなりません。自分勝手のわがまゝだけでは、遊びがいつも獨りぼつちの狭い小さいものに墮ちて、他と力をあはせた大きな遊びにならないことを、出来るだけの理解度において知らさなければなりません。それがやがて倫理――

道德感を培ふ土臺となるのです。

その他、子どもの遊びには、單に遊びだけでなく、必ずそこに精神方面の鍊成があるものと知つてゐなければなりません。單なる遊びだけだつたら、無意義に近いと思ふべきです。しかし、それが遊びの興味を殺ぐやうに、露骨に顔出してはいけません。精神方面の鍊成が遂げられれば遂げられるほど、遊びが興味深くなつて來るものでなければなりません。遊びを完全に興味深くやらうための精神的鍊成なのですから、それが逆になつては本末顛倒といふことになります。

子どもの遊びは大人の仕事と同じなのですから、大人になつて初めて精神方面の修養や鍊成があるものと思つてはなりません。子どもにも子どもなりに、遊びを仕事として、仕事と同時に精神修養があり、鍊成があるものと思はなければなりません。

多くの人は、仕事は仕事、修養は修養と、別々に考へてるかも知れませんが、それは絶対に分離させてはいけません。眞の仕事と眞の修養は同時に行はれなければなりません。仕事が修養であり、修養が仕事でなければなりません。仕事によつて思想し、仕事に

よつて科學し、仕事によつて宗教しなければなりません。だから、仕事のあるところ必ず修養ありです。

仕事は私たち人生の全部なのですから、仕事以外には何物もないわけです。私たちの生命さへ、仕事に授かつてるもので、私たち自身のものではないのです。だから、私たちは絶対に仕事しなければなりません。

それを「仕事は生活の手段だ」などと考へる思想は、生命を空なるもの、或は官能的・享樂的なものと考へてるからです。もしさうしたものが人生の目的だつたら、生活が動物以上には出ないと思ひます。外國思想です。

仕事—生産!! これは直ちに私たちの無限なる自己發展なのです。無限なる自己發展!! これこそ人生の目的なのです。その自己も單なる自己ではありません。神に通ずるの自己なのです。だから、私たちの仕事は、單なる物を作るものではありません。自分の全精根をぶち込んで、そこに自分の姿を鑲刻まうけいするのです。單なる物ではありません。自分の物的姿なのです。いや、温かい自分の身體なのです。そして私たちは、生命のあるかぎり限りな

く進展します。

だから、私たちは、仕事することによつて更に自分をみがき、更に仕事することによつて更に自分を研ぎすまして、完成へ完成へと進み、やがては神に通じなければならぬのだと思ひます。それが修養なのです。仕事と修養は、絶対に分離させてはならぬと思ひます。常に仕事の完成への手段として、仕事と共に修養がありたいものだと思ひます。それが普通にいはれる文字通りの「修業」でもあり、佛語でいふ「行ぎやう」でもあると思ひます。

佛徒が佛の「まこと」——佛誠につかへる仕事として、難行苦行することはいゝが、それをそのまゝ私たち衆俗の上に強いることは悪いと思ひます。その難行苦行から得た尊い體驗を、私たち衆俗の上にうつし、私たちの仕事をとほして、佛誠の世界に導き入れるべきだと思ひます。いはゞ私たちも佛徒のやうに仕事を行まよして、佛誠の悟りの世界に至るべきでないか。それがいはゆる「修業」だと思ひます。

だから、仕事のないものには、人生もなければ、修養もないわけです。仕事のあるものゝみ、人生があり、限らない自己發展があり、修養があるわけです。だから、私たちは絶

對に仕事を持たなければなりません。生命はそのために授かつたのです。だから、輕々に生命を捨てることは悪いが、時には、仕事のために生命を捨てゝもいゝのです。そこに、私たちの祖先が道義の最も高いものを示したことは、皆さまざまご存じと思ひます。仕事のために生命を投げうつたり、仕事のために自刃したり、皆それなのです。

次に、道義方面の教養―躰つけですが、これも色々ありませうけれど、「第二章家の道一、神ながらの道」のところで、「すなほ」「まこと」「おこなふ」の三つを、最も大切なものとして擧げておきましたから、これを固く遵奉させ、「神ながらの道」に精進させることが、肝要かと思ひます。それは道義を行ふ根本となるものですから、忽にしてはなりません。

「すなほ」「まこと」「おこなふ」の三つは、單に子どもだけの教訓ではなく、私たち大人の教訓としても立派なものだと深く信じてゐます。

で、子どもが満六歳となれば、學校にのぼるわけですが、學校は家庭教育の延長だと考へていゝのですから、よく家庭における今までの教育方針や経過状況を申しあげ、わけて子どもの習癖・特長・將來の方針など審さに校長及び受持教師に傳へ、家庭と學校が急激に教育軌道を異にするといつた手落のないやうに取計はなければならぬと思ひます。

そして絶對的に學校及び受持教師を信頼し、その教育軌道に忠實な隨順を示して行くことが肝要だと思ひます。よく生半解に知つたかぶりで、學校及び受持教師に、抗議的な無理な申出や註文をなすお母さまもゐますけれど、それは、決していゝ結果をもたらしません。でないことを思はなければなりません。むしろ、協力的にきはめて謙虛な心持と態度で、参考として申出ることはいゝことですが、取つめてやらう的なものは困ると思ひます。やはり「餅は餅屋」なのですから、全幅の信頼を學校及び受持教師に捧げることによつて、子どもはよく育つのだと思ひます。

次に、子どもの持つて生れた天稟的な特性の發見なのですが、これは子どもの人生的將來を決定する有力な鍵なのですから、あらゆる方法と視察をつくして、發見してやつて頂

きたいと思ひます。

子どもには、早稲ぶとりがあり、晩稲ぶとりがあり、俐巧で魯鈍を内に包んでるものがあり、またその反対に、魯鈍で俐巧を内に包んでるものがあつたりして、なか／＼容易に子どもの天稟的な特性といふものは発見されがたいものですけれど、それが発見されないと、羅針盤のない船のやうなもので、一切が五里霧中となるわけです。教育の方針も決まらなければ、将来の算段もつかないわけです。たゞ「何かになるだらう」位の煮えきらない浅はかなものでは困るのです。それだけ車が空廻りすることになります。

やはり出發が早ければ早いほどいゝと思ひます。出發が遅れればそれだけ到達も遅れると思ひます。途中で取かへすにしても、それだけ苦勞が多いわけです。もう人生の半ばが眼の前に見えてるのに、まだ出發もしないで逡巡して居る青年諸君が多いのを見て、私はうたゝ淋しくなる一人です。

「勉強さへしてゐれば何かになるだらう」のあやふやな煮え切らない態度がさうさせたものと思ひますが、朝がもうとつ／＼に明けて太陽がカン／＼中天に照つてるのに、「さて

これから」といふのでは、餘りにもその人生ぶりが悠長でのん気すぎてると思ひます。それではさう大した仕事も出来ぬと思ひます。

やはり、「鶏鳴と共に起きいで、月星と共にかへる」といつた精勤ぶりでない、大偉業はなし得ぬと思ひます。また人生の幅と長さも倍増されることがないと思ひます。

私は世のお母さま方にお願ひしたいと思ひます。「子どもは出来るだけ朝早く起してやつていたゞきたい」と。支那の孔子は、「人生五十にして天命を知る」といひましたけれど、それでは餘りにも遅いと思ひます。もう日が暮れてゐます。

むろん、天命を知ることの困難なことは、十分に承知してゐますけれど、「日暮れて何の天命ぞや」とも言ひたいのです。少くも今日では、「人生三歳にして天命の萌芽を知る」でなければならぬと思ひます。でなければ間にあひません。だから、お母さま方にお願ひするので。

「出来るだけ早く子どもの天稟的な特質——天命を見つけてやつて頂きたい」と。それが子どもを朝早く精神的に起すことなのです。いつまでも眠らせておいては、それだけ人生

の出發が遅れるのです。

だから、子どもを朝早く起すには、一家の總力をあげて、これに努力していただくのです。近所の協力をかりてやれば、なほ萬全を期することが出来ます。學校の先生の協力を借りるのは遅いと思ひますけれど、それも發見されるに越したことはありません。どしどしお力を借りていよと思ひます。兎も角、あらゆる方法をつくして、一日も早く發見されること
が肝要と思ひます。

今までは、社會における需要供給の經濟原理から、私たちの生きる道——職業を決定して
みましたけれど、それは尊い私たち人間を一個の商品として取扱つて、まことに恐ろしい
罪惡的な冒瀆なのです。

會社に需要があれば會社へ、工場に需要があれば工場へ、銀行に需要があれば銀行へ——
と流れてゐた狀況は、一般の物的商品とちつとも違つてゐないので、そこに供給の過剰
があれば、あぶれなければなりません。それが就職難だつたのです。あたら大學までも卒
業した有爲な青年でありながら、供給過剰のあぶれを食つて、徒食してゐなければならぬ

といふことは、個人としても國家としても、大變な損失と見なければなりません。

これでは「生きよう」とするには、どうしても他を排撃してまでも、その需要數のう
ちに入らねばなりません。さうなれば、道徳も何もあつたものでなく、他を嫉妬し猜疑
し、奸策を弄してまでも、他を乗り越えてその數に入らうとします。だから、同じ大御國
の同縁的な親しい國民でありながら、隣に住んでゐても背中あはせの冷たい敵視となり白
眼となつて、ついこの間までは來たのです。これが如何ほどに平和なるべき社會を、國家
を、無秩序的に混亂せしめて來たか、説明するまでもなく十分にお判りのことと思ひま
す。

もと／＼「社會」といふものは人間の寄合ひで、さうした無秩序で本能的なものなので
すが——（これは後ほど次の章三「國家と社會」の項で詳述します）——この「社會」を
秩序的に統一し一體化して、一の生命體として氣息いきまあらしめるためには、國家的・身體的
な組織と體制によるより外ないので、だから、今までは「國家」を忘れた純然たる「社
會だつたのです。さうした思想と感情が、私たちの上を吹きまくつてたわけです。だから

私たちは一日も早く、身體的・國家的に目ざめなければならぬのです。

皆さまもご存じのやうに、私たちの身體的細胞は一億や二億でしかかぬと思ひますが、それほど多數の細胞が、よくもよく組織的に統一し一體化し、よくそれ／＼に機能を發揮して、一の生命體たる私たち人間を保持してゐる——その由因は、そも／＼どこにあるのか。深く考へて見る必要があると思ひます。これが眞の國家的・身體的組織と體制なのです。

何もさう速くに高い原理があるわけではありません。最も身近にあるのです。今日、「自覺々々」と盛んに言つてますけれど、それもさう速く高いところにあるのではなく、私たちが私たち自身の身體に自覺すればいゝのです。私たちはどんなに叡智的に聰明にならうとも、私たちの身體以上には出れないものなのです。いはゞ私たち人間以上には絶対に出来ないものなのです。

では、私たちの身體的組織と體制とはどんなものか。それは、何億といふ数知れない細胞が、悉くそれ／＼の天稟的な特質と機能において、いはゆる天命において全體的な聯

關と有機を保ち、常に一の偉大者に歸一申してることなのです。そこにもう社會的な分離や争ひがなく、渾然と一體化された眞の國家體制があるだけです。

こゝに來て、子どもの天稟的な特質——天命を、一日も早く發見していただきたいことを願つた私の衷情も、十分に理解していただいたことと思ひます。子どもの天稟的な特質——天命を、一日も早く發見し見つけて、これを最も福よかに育て完成し、「國家」の身體的な機能機關の一細胞として役立てよう、熱い高い念願に外ならなかつたのです。

私たちは「國家」の温かい身體内に、その一機能機關として職能をさづけ、その間から發展的に生産された「子ども」が、國家的・身體的に不用である理由は、絶対にないと思ひます。必ずや絶対有用だつたが故に、生産されたのだと思ひます。そこは絶対的な信仰を親自身も持ち、「子ども」にも持たせたいものだと思います。そこに眞の生き甲斐を感じ、如何なる困難辛苦をも克服して、七生八起の大勇猛心に沸き立つことが出来るのだと思ひます。

こゝで、子どもを「あほうだ」の、「馬鹿だ」といつて、罵り輕侮することが、如何

に罪惡的な悪いことか。十分にお判りのことと思ひます。それは國家的に「有用である」の自信と信仰を失はしめるからです。この自信と信仰を失はしめては、精進・努力の電源地を破壊したも同じなのです。

よし、それが馬鹿だらうが、あほうだらうが、馬鹿は馬鹿で、あほうはあほうで、國家的に十分役立つのですから、それを罵り輕侮するの理由は絶対にないと思ひます。殊にこのごろ國家は、馬鹿やあほうが數少いので困つて居る際ですから、馬鹿・あほうは大に歡迎する筈なのです。更にそれが大馬鹿・大あほうとなれば、いよ／＼國家は悦ぶ筈です。

餘りに今までの商品生産的な教育が、さかしい小利巧者ばかりを作りすぎて、現在の狀況では、國家の身體的な機能機關に相當の缺陷があることは事實なのです。いはゆる國家の心臓部だけが歴大に發達しすぎて、手や足が餘りにも瘠せすぎ細りすぎて困つて居るので、この畸形を一日も早くなほさなければ、絶対に不敗の健全體制とはならないのです。

今まで職能に高卑貴賤があると考へたことにも、かうした國家的畸形を招來した原因があつたのではないかと思ひます。職能には絶対に高卑貴賤はない筈です。天稟的な特質がも

つ職能でありさへすれば、何れの職能でも全體としては、有要不可欠なものですから、何れが高貴だ、何れが卑賤だといふことは、絶対にありません。その思想と感情は絶対に排撃し直さなければなりません。

だから、あほうでも馬鹿でも、それが天稟的な特質である以上、國家の全としては絶対有要なもので、それで結こう役立つのです。たゞその天稟的な特質が、天稟的に伸ばされるだけ伸ばされて居ることが肝要です。いはゆる、その素晴らしい生長さに一の偉大感が伴ふものがいゝと思ひます。

これが國家全たいからいへば、偉大な機能的部分品として大に役立つのです。さうした偉大な部分品によつて組織され一體化された國家的身體こそ、最も偉大な生活力を發揮するものだと思ひます。一億國民の總力結集とは、かうした偉大な部分品の、必然的な組織と協力と一體化によつてのみ、かち得られるのでないかと思ひます。だから、あらゆる方面の智慧と才能があればあるほどいゝのですけれど、それ等のすべてが天稟的な特質の一に統制されてゐなければなりません。ばら／＼な雜木林のやうでは困るのです。それも天

稟的な特質ならば、薪炭用として役立つから止むを得ませんが、國家的な大建築には大樹的な一本木が大に役立つわけですから、天稟的な特質に將來性のある梢しんが立つてゐる———これが大切だと思ひます。

だから、子どもの教育は、「國家における身體的な機能機關としての、偉大な部分品を生成し啓育し鍊成するにある」と言はなければなりません。この「偉大な部分品」の生成と完成のために、一切の教育方法・施設が統制され歸一されて、その鋒がいつも目的の一端に向けられてゐなければなりません。今までのやうな並列的なばらばらばらばらのものでは困るのです。教育の商品見本的な陳列棚からは、何物も生れないと思ひます。

この「偉大な部分品」が最も組織性・協力性の高いものであるは、すでに述べましたから、こゝで詳しいことは述べませんが、その組織性・協力性が部分品として、最も根強い生命的なものであることを、今一ど強調しておきたいと思ひます。

如何に小粒など、粟でも、生きるに事缺かない完全だとなれば、それはそれで單個に生きて行かれますから、他と協力し組織するの必要がありません。だが、部分品となれば、

さうした簡單なわけには行きません。絶対に他と協力し組織化されなければ、生命がないも同じです。部分品として如何に完全でも、單個で機能力を發揮することが出来ません。他と協力し組織化されて、初めて機能力が發揮され、生命體となるのです。だから、部分品の組織性、協力性といふものは、部分品として生命的な渴求であり要請でなければなりません。

こゝに來て、今日盛んに叫ばれる「一億一體化」の運動が、どこに最も鋭い鋒を向けねばならぬか。———の問題も、明瞭に解答されたわけだと思ひます。これは一億國民の全部を、それ〴〵に國家の身體的な機能機關として、偉大な部分品に覺醒せしめるより外ないと思ひます。

最後に、「質素簡朴の生活」ですが、これは「まこと」の道の現はれとして、最も根本的なものだと考へて頂きたいと思ひます。いはゆる眞の「まこと」は、必ず質素簡朴な形と姿において現はれることです。「質素簡朴」とは殆んど裸かの最も自然に近い形と姿な

のですが、これは「質實剛健」も同じでして、最も生活力の高い將來性あるものなので
す。だから、これを失つて華美となり安逸となれば、生活力は低減し將來性が消失するわ
けです。そして最後には必然的に滅亡の餘儀なきに至るわけです。

これを私たちの祖先は、如何に警戒し自誠して、質實剛健・簡朴質素の生活を保持する
ことに努力し精進して来たか、量り知れないものがあると思ひます。今日の國家的盛運の
大も故なしではないのです。

その適例を住居の家屋の上に見ましても、きはめて判然とすると思ひます。わすか木材
と土と紙で組合はせた家屋なので、地震があれば揺れ、火事があれば燃え、風があ
れば戸障子の隙間から、惜しげもなく吹き込んで來ます。その上に暖房の装置とはなく
冬など耐らなく寒いやうです。

今日こそ必要以上に高く土塀を築き、嚴めしく門をかまへ、番犬を蓄へたりして、富の
虚勢を張つてゐるものもありますけれど、昔は上御一人の御皇居ですら、極めて平民的で質
素に渡らせられた筈です。御皇居らしい御皇居の造營は、奈良朝以後なので、それ

以前は、ひよつとしたら長多いことだが、日常の御生活が垣間見することが出来たのでな
いかと思ひます。京都の御皇居にしましても、きはめて質素なもので却つて長多いほどで
す。更に今の宮城にしましても、徳川時代の權勢的な面影がむしろ大きい方で、質素簡朴
に御修築になつたかも知れないが、ちつとも華美に附け加へられた何物もないやうです。

私たちの故里に行きますれば、田舎だといふ理由もありますが、まことに質素簡朴なも
ので、門もなければ、土塀や板塀もなく、隣との見界さへなく、どこからでも隣へは往復
が出來ます。開放的で平民的で、そこに上下高卑の隔てなどちつともありません。

家屋なども粗末なもので、壁がおち戸障子が破れてゐても、ちつとも氣にならないらし
いのです。風が吹き込み雨が洩つても、「雨のやつ、えらい漏りよる」といつた態度で、
却て雨に親懐の情を感じてるやうな容子なのです。全く自然と共に生き、自然と共に死ん
で行く種族のやうに見えます。

衣服にしてもさうだと思ひます。まことに簡単な構造で、「衣はたゞ暖を取るに足れば
足る」といつた形です。私の父などは最も昔風だつた関係もありませうが、年百年中ぼる

くつぎした百姓衣を、一枚きりしか着てゐなかつたやうでした。お祭などに一それでは餘りにひどい」と姉などが盛んにいふものですから、しぶく着かへてゐましたけれど、お宮の参拜がすみ獅子が舞通つて行けば、もう百姓衣に着かへてゐました。誰かゞそれを詰じると、「何、この方が氣樂だよ」といふのでした。

私などもお影さまで、姉などが若い力一ばいで織つた、部厚いこつこつした木綿緋の着物を、春が来れば單衣に、冬が来れば綿入れられて着せられました。夏は殆んど裸かでしたから、着物に對して何の記憶もありません。

「何、贅澤いつちやいけない。着物は寒くても風邪さへ引かねばいふんだ」といふ、父の教訓だつた事を覚えてゐます。その時分は大の不平でしたが、今になつて考へて見ればなるほどその通りで、着物は風邪さへ引かねばいふんだと思ひます。むろん、禮法上の容儀も手傳ひますけれど、だが、それとても着物の枚數や華美を要求する筈のものでないと思ひます。

私は、こゝで、私の父の偉さを誇るわけではありませんが、その頃の父といふ父は、す

べてさうした態度でなかつたかと思ふのです。着物によつて自分の値打が増すとも減るとも考へてゐない、全く無頓着な、「着物などに彼これ氣づかふのはうるさい」といつた態度でした。

食物などもさうだつたと思ひます。「食は生をつなぐに足れば足る」の言葉を、最も厳しく守つて來たやうです。私の家などでは、純粹なご飯といへば佛に供へるご飯だけで、他はすべて何か入つてゐました。主として芋・薯・お薩などでしたが、時に青豆・豌豆・粟・粟など四季折々のものが入りました。今日のいふ「節米」なのです。

魚は海が近かつたものですから、割合に多く食膳にのぼりましたけれど、それも金を出したものはなく、濱の人と物々交換したものでした。だから、唯で食ふ勘定になつてたわけです。肉類は殆んど皆無といつてよく、まあお祭りやお正月のお祝ひどき位だつたと思ひます。

間食になる果物は、家の周圍に季節々々のものが何本づつか準備してありましたから、それが供給してくれました。だから、幼少なころにお菓子など買った記憶がないやうで

す。金など絶対に持たされなかつた関係もあるでせうが、またさうした必要もなかつたやうです。

かうした質素簡朴の生活的な根柢は、神への篤い信仰から來てるやうにも思へました。神への奉祭には、心を淨にし身を清にしなければならぬことを、高き信條としてゐましたから、生活が出来るだけ簡朴質素にならなければ、心身の淨清にはならないわけです。

「淨清」とはまさり物をすつかり除き去つて、その物一つに透きとほることですから、私たちが眞に淨清になるには、心身ともに裸かになるより外ないのです。身は寒暑や禮儀の關係もあつて、眞の裸かになることが出来ませんけれど、心は裸かになればなるほど、その趣旨が徹底するわけです。だから、身にまとふ着物も寒暑や禮儀の最低限度にとどめて、出来るだけ裸かに近く質素簡略にしたわけです。

この神への篤い崇敬と信仰的な思想・諦觀が、非常な厳しい高さや強さにおいて、住居の上に着き、衣服の上に着き、食べ物の上に動いたものと思ひます。また、道義の上にも強く動いたことは言ふまでもありません。

だから、「物を煮たり焼いたりして食べては贅澤である。勿體ない。神に對して恐れがある」とも、私たちの祖先は考へてたやうです。それは神にお供へする品々のうちで、一品も料理したものがないうところから、さうした考になることは當然だと思ひます。

「神さまはいつも生のまゝで召しあがつていらつしやる。わけて人間は……」といふことになるのです。だから、出来るだけ生で食へることになつたと思ひます。それは神のご生活になすらふことなのです。今日の刺身・洗ひなど、その面影でないかと思ひます。

私なども幼少なころは、何でも生で食べたことを覚えてゐます。季節順によつて數へますと、いたどり・うど・人参・大根・さつまいも・栗。

だから、料理の仕方なども出来るだけ手のこんだものは避け、簡素々々となつたのだと思ひます。支那や西洋料理の手のこんだ脂濃くしつこいものは、日本の神祕的清淨の生活から見れば、きはめて縁遠いものだと思ひます。それは西洋的な住居・衣服にしても全く同じで、肌身に喰ひついた合理的なものであるが、私たちに寒々と隙間風のある、しつ

くり来ないものだと思ひます。

だが、こゝに、お母さま方に偉大なことをお告げしなければなりません。今言つたやうな粗品・粗料理を食膳の上にのぼせながら、それを食し箸する心境の宏大と悠遠は、全く驚嘆するに足ると思ひます。いはゞ偉大な富者だつたのです。わが祖先の諦觀的思想と感性の高さに、頭をさげないわけには行かないのです。

すなはち、精白のご飯は清きものゝ代表者―神としていたゞき、味噌汁は濁れるものゝ代表者―佛として親しみ、一尾の小魚は單なる小魚ではなく、海として味ひ、一塊の芋は單なる芋でなく、山として舌うつし、一片の茶つばは里として咀みしめたのです。そして如何なる粗品、粗料理であらうとも、すべて「山海里の偉大な珍味」として激賞し、一日の辛酸勞苦を陶然と忘れ去つたのです。

だから、私たちの祖先は、三度々々、神佛ともにもます山海里の大自然・大宇宙を食つてたことになるのです。世界廣しといへども、これほど大きい、これほど豊饒な榮養を攝取してたものがありませうか。今日、國運の盛大・隆昌、旭日の昇るときである動力源

は、遠くこゝにあるのではないかと思ひます。

今日、多くの人たちはいひます。「日本の食べ物には眼の食べ物で、口の食べ物でないから榮養價值が少い」と。なるほど、今日の浅い、物の表つらだけを見て眞底を見ない科學からいへば、或はさうかも知れません。だが、私は斷じてさうは思ひません。「神佛ともにもます大自然・大宇宙を食つてゐて、どこに榮養價值が少いのか」と、強く反問したいと思ひます。

神佛ともにもます山海里の大自然・大宇宙を食つてゐる廣やかな心境では、身體の各機能機關が、のう／＼と伸びられるだけ伸び、廣ごれるだけ廣ごつて、消化・攝取の能力を最大高限に發揮し、殆んど不消化物・不攝取物の殘滓がないほどに、消化しつくし攝取しつくすと思ひます。

しかも、その神力的な最大限の機能のうちに、今日の浅い科學では到てい知り得ない、一の神業的な祕力といつたものがあつて、今日の浅い科學が無といふ無の中から、どんな驚異的な榮養を攝取してゐるかも計り知れないと思ひます。たとへば布哇の偉大な戰果のや

うに。

これに反し、單に「物を食つてゐる」といつた狹隘な心境の食ひ方では、すべての機能機關がそれだけ狹隘に屏息し萎縮し、持つてゐる機能を十分に發揮し得ないところから、どんな栄養價値の多い高價な食べ物でも、過半以上は消化不能・攝取不能として排泄されるのでないかと思ひます。

なほ私に言はせれば、同じ自然の温かい懷に抱かれ、同じ日光と水と土と空氣を食つて生育してゐる動植物が、さうその形質において遠い開きがあるものでないと思ひます。むしろ多寡の差は多少ありませうけれど、大體において、自然の持つてゐるものゝ全部は、小さいなりに授かつて生きてゐるものだと思ひます。でなくば、自然の生産でないことになりません。

だから、その動植物を食べ物としてゐる私たちは、その食べ方さへ廣やかな大自然的でありさへすれば、何を食べ物としようとも、生は完全に保つて行けるものと思ひます。「食べ物は何がいゝ、何が悪い」といふのは、私にいはせれば、我まゝで贅澤といふものだと

思ひます。

この廣やかな大自然・大宇宙的な心境と諦觀は、ひとり食べ物の上ばかりではありません。祖先の生活全部を被つてたものと思はなければなりません。またわが祖先は、「物理學」といふものを持つてゐませんでしたけれど、その物理學的原理を生活的に知つてゐました。

すなはち、「最も小さいものゝ極限は、最も大きいものゝ極限を招ぶ」といふことを生動的に知つてゐました。「一尾の小魚の上に茫洋たる海を見る」といふのは、それなのです。一塊の草の上に大山の動きを感じる」といふのもそれなのです。「質素簡朴の極限に神を見る」といふのもそれです。「一輪の花の上に大自然のいぶきを感じる」といふのもそれです。「一鉢の松の枝ぶりに鶴の舞ひおるを見、天然の妙なる松籟をきく」といふのもそれです。

牢屋のやうな狹隘な茶室にゐて、たがをはめられたやうな舉措振舞ひの嚴しい作法において、わが祖先は何を見、何をきき、何を味ひ、何を感じ、何を瞑想しつゝあつたか。お

考へになつて見た方がありませんか。

狭い極限の茶室にゐて、廣い極限の宇宙をながめ、厳しい作法的な舉措振舞ひにおいて、寛かな極限の佛的な境界にひたり、「わび・さび」といつた茶道の極致的なものを味はつてゐたのです。それは精神修養的な嬉しい楽しみだつたのです。

かうした質素簡朴な心境と諦観において、昔の武士が常に戰時的な生活を、平時において行つたことも肯かれると思ひます。戰時的な生活といつたところで、質實剛健・質素簡朴な生活以外には出ないのすが、それを職掌柄から戰時的に考へたわけです。たが、それは武士にとつて苦しい生活ではなく、むしろ楽しく嬉しい生活だつたと思ひます。なぜかならば、日一日と神に近づくことが出来たからです。

楽しく嬉しい生活だつたことは、ひとり武士だけでなく、質素簡朴な生活を遂げてたわが祖先のすべてが、さうだつたと思ひます。常に樂天的で、どんな苦しい生活にも希望と愉悅をもつてこれに當り、何等の暗い憂ひもそこに持つてなかつたやうです。なぜかならば、祖先たちは皆、神を持つてたからです。

生活が裸かに近く質素簡朴であればあるほど、偉大な神に參調することが出来ると、深く高く信仰してゐましたから、どんな辛酸苦勞のまつた中にも、晏如として身をおくことが出来たのです。むしろ、それが極限的に大であらうことさへ希望したので。常に神の偉大に感激して勇氣千倍するの壯舉に出たのです。

昔の人が禮儀が厳しく高かつたことも、今日の私たちから見れば、全く驚嘆に値するほどですが、それも祖先たちには、何ら苦にも氣にもならなかつたのです。むしろ欣然としてこれを履行してたのです。自分の舉措振舞を極限の厳しさにおくことによつて極限に寛容な世界を味ふことが出来たからです。

こゝに來て、わが祖先たちの生活的・道義的觀念の立て方が、今日の私たちとは甚しく違つたことに、お氣づきだらうと思ひます。今日の私たちは、禮儀作法の厳しさは、私たちの生活を拘束し束縛するものと解釋し、質素簡朴の生活は貧乏らしい苦しい生活だと嫌惡し、道德などは一文の利益にもならないものと勘定してゐるのです。そして「出来るだけ樂をし、出来るだけ贅澤をし、出来るだけ官能の満足をはからう」とばかり、心

を千々に碎き身を火のやうに焼いてゐるのです。

だから、それを得られなければ、死ぬほどに落膽し悲觀し、萎縮し、再起再興の勇氣も出ないといふ、哀れな有様です。そしてそこに何等の頼母しさもない、空疎、空哀、全くがらん堂とした荒れ野を見るやうな光景です。これでよくも生きてゐられるものだと思います。世が騒擾しく取亂れて来るのは、當然だと思ひます。

「こゝに何が失はれてゐるのか」世のお母さま方は十二分にお考へになつて、最愛のお子さま方に最善の幸福が持ち來たされるやう、教育されんことをお祈りして、次の章にうつります。

第四章 「國家」における母性的

地位と責務

一、「國家」の身體的發展——「家」

私たちの身體は、全體を含んだ一單細胞から發展して出來たものです。最初から頭・胴・手・足・内臓機關が出來てゐたのではなく、それ等になるべき全體を含んだ一單細胞が、母の體內において發展して出來たものなのです。

その發展の仕方も、今日は頭、明日は胴といった順序に出來たものではなく、それ等すべてが相關と平衡の有機關係において、いつとはなしに同時的に生成發展して出來たも

のです。そして生れれば、彼自身の生命力によつて思想し感情し意欲し、内包する組織機關の健在である限り、愈々ますます生成し發展して止みません。

母はその發展にともなふ榮養の補給はしましたが、他に何物も附加してはゐません。すべてがその單細胞に含まれたものだったので、これを有機的發展、或は身體的發展といひます。動物・植物の生命體と稱せられるものは、皆この發展によるものです。

たとへば、一粒の麥にしてもさうです。一粒の麥にはすでに麥となるべき全體を含んでゐます。その麥が地におろされて、適當な日光の温さと水濕によつて、發芽し根を出し、葉を出し株がふえ、穂を出し花を開き實を結ぶといつたことになるのです。

さうした麥の全體となるべき一切のものは、地におろされて他から附加されたものではなく、すでに一粒の麥のうちに含まれてゐたのです。むろん、その發展にともなふ十分な榮養は、日光・空氣・水濕の中から攝取してゐますけれど、その他に何物も附加されてゐないのみか、その榮養的攝取の機能力さへ、一粒の麥のうちに含まれてゐたので、これは神祕といはうか、不可思議といはうか、そこに私たちは、天然の一つの靈祕といつたものを感じるのです。

だが、この有機的發展によく似たもので、甚だ異つたものが一つあります。それは無機的發展、——發展といふよりも構成といつた方が妥當かも知れませんが、すべての機械がこれなのです。

たとへば、ロボットといつて人造人間のことですが、甚だしく私たち人間に似てゐます。むろん、似せて造つたものですから似てゐるわけですが、頭もあれば胴もあり、手もあれば足もあります。目・耳・口・鼻など一切が私と同様に揃つてゐます。いつか三越のデパート玄關に立つて、お客に色々と愛嬌を振りまき、大變な人氣を招んでゐました。

かくも精妙に出來た人造人間にしましても、結局は無機的構成にすぎないもので、私たち人間のやうに有機的發展によつたものではないのです。また自動車・飛行機にしても、その他あらゆる工業生産用の精密な諸機械にしても、みな無機的構成の外に出ないのです。これが一粒の種子からでも出來るとなれば甚だ愉快なのですが、さう問屋では卸しません。面倒でも一つ／＼今日は頭、明日は胴、明後日は手・足といつたやうに、部分品的に

順次に製作して行かねばなりません。そして最後に組合はせて、人造人間となるわけです。これを無機的構成、或は機械的構成ともいつてゐます。

かうした無機的構成、或は機械的構成によつたものには、第一、生命といふものがなく、したがつて、私たちのやうな思想・感情・意志といふものはありません。だから、自分の意志による活動といふものもありません。常に製作者である私たち人間の意志によつて動き、その效用を發揮します。

もと／＼機械といふものは、私たち人間の手か足か目か口か耳の物的發展として、工夫製作されたもので、私たち人間によつて動き、私たち人によつてその效用を足すものであるは當然なのです。

機械が如何に精妙に進歩發達しようとも、絶対に私たち人間以上に出るものでないと思ひます。飛行機が無電で操縦されるやうになりましたも、私たち人間を抜きにして飛行機が飛ぶものではないと思ひます。機械が私たち人間の生産である以上、絶対に私たち人間以上に出るものでないと思ひます。

だが、萬が一、機械が私たち人間以上に進歩したら大變だと思ひます。機械が機械自身の意志によつて、自由に行動するやうなことにでもなつたら、私たち人間の壊滅する時期だと思ひます。或は、私たち人間のすべてが昇天して、神になつた時期だらうと思ひます。何れにせよ、人間の影がこの地表から消えさつた時期に違ひありません。

だが、これに似た時代が一時ありました。それもさう遠くはありません。日本では明治晩期から大正にかけてのころです。いはゆる物質的科學文明の滿潮時代、利潤一天ぼりの資本主義産業の黄金時代がこれなのです。この時代においては、貴き生命ある私だち人間も、機械の一齒車として虐使され、工場では私たち人間よりも、一エンヂンの方が高貴な位置におかれました。

そして科學が機械を創産したものですから、「科學萬能」といふ言葉までも流行し、いはゆる科學が神の位置にまで昇せられました。或一部の資本階級を除いて外は、私たち人間など殆んど眼中になく、全く機械以下に虐遇されたといつてもいゝほどでした。

だから、その時代では、人間よりも物、物よりも機械、機械より金でした。金で欲する

がまゝに、人間が買はれ、物が買はれ、機械が買はれ、更に利潤を倍加することが出来たからです。札ビラで頬を叩かれ涙をのんで屈服する男もあれば、札ビラであたら真操を蹂みにじられる女もありました。科學萬能がやがて拜金主義となり、「金さへあれば如何なる罪惡をも購ひうる」といつた恐ろしい時代が來ました。

官職なども金で買はれ、代議士なども金で當選し、婦女子なども金で賣買され、金と結婚し、全く人間壊滅の時代が來さうだつたのです。米英などその最も魁なるもので、科學萬能の大旗をふりかざし、海賊的に全世界を横行し濶歩し、あくなき蹂躪を擅にしたわけです。今日の強大を致した原因がそこにあるのです。

だから、彼等の「國」といふ國は、すべて官能と我利亡者の横行する、いはゆる「社會」なのです。そこに自制的な麗はしい秩序も道義も全くないのです。むしろ「法律」といふもので取締つてはゐますけれど、それは上部だけのご都合主義で、裏面は百鬼横行・夜叉亂舞の形なのです。そこに人間として見失つてゐる大きなものに氣づかないのです。哀れなものです。

考へてもご覽なさい。米國などは、今から四百五十年ほど前に、コロンブスが亞米利加大陸を發見してから、潮のやうに彼たちは移住し、わけてイスパニヤ、ポルトガルの國人が多かつたのですが、後に英國人が増強し、そこに各國人が我利亡者的に雜居したわけです。それが税金か何かの利益問題で、英本國に反旗をひるがへし楯つき、その戰果によつて獨立したのです。それは今から百五十年ばかり前のことです。わが國でいへば徳川時代の末です。そして四年毎に運轉手が變るといふ、全く機械も同様な國柄なのです。

英國のごときも建國の年代は少々古いやうですが、それも今から七百年ほど前に、日本でいへば鎌倉時代の初期ですが、その頃にやつと國の基礎が出來たのです。それも貴族・僧侶・市府・地方といつたわけで、半獨立的に抱き合はないまゝに雜居してたことは申すまでもありませんでした。それが血の雨を降らして「大憲章」といつた法規の制定となり、今日のやうな大機械的運轉の機能を持つて來たのです。

その他、隣國支那のやうにまだ機械的構成にさへ成り得ない國もありますが、世界の國といふ國は、すべき機械的構成の組み立て出來てると見ていゝのです。濠洲・カナダ・南

米の國々、皆それなのです。

たゞ盟邦獨逸と伊太利だけは、全體主義・生命主義に目ざめ、血液の純潔をはかり、祖國—日本を龜鑑として、銳意興隆の盛運に乗りつゝあることは、皆さまご存じと思ひます。これも年代きはめて若いことは、申すまでもありません。

今度の大東亞戰爭、獨伊を加へての世界戰爭は、この機械的構成國と有機的發展國との戰爭なのです。或は輸贏角逐といつてもいゝでせう。油斷はなりません、機械は如何に進歩すとも、絶對に人間以上にはなり得ない」の固き信條において、もう勝敗の數は決定してゐると思ひます。

たゞ問題は「私たちがどれほどまで偉大な人間になれるか」であると思ひます。いはゞ「一億の私たち——國家的細胞が如何に強靱に有機化し一體化されて、如何に奉仕の崇高と至純なものを、國家的身體の一者に捧げうるか」に、かゝつてると思ひます。これ、國家が宮本武藏のやうな厳しい身體的研磨と練成を必要とし、國民もまたそれ／＼の職能において、最善の奉仕を身體的一者に捧げるやう要請される所以です。——（これはまた後

ほど詳しく述べます）——

長多くも、わが日本だけは、人皇—神武天皇から悠久三千年、それ以前の神代の年代は計り知れないほど宏遠なのですが、その時代から生成發展の生命的・有機的發展だつたのです。

日本で最古の國寶書である古事記に記された神話によりますと、「天地ノ初ノ時、高天原ニ成リマセル神ノ名ハ、天之御中主神、次ニ高御產巢日神、次ニ神產巢日神」とあり、「國稚ク浮脂ノ如クシテクラゲスタ、ヨヘル時ニ、葦牙ノゴト萌エアガル物ニヨリテ……」と記されてありますから、わが建國は天地創草の時代からと申さねばなりません。建國肇始の悠遠なこと、全く想像の外にあると申してもいゝと思ひます。

「是ニ於テ天神諸命モチテ、伊弉諾命・伊弉冉命ニ柱ノ神ニ『是ノタ、ヨヘル國ヲ修理固成セ』ト詔シテ、天沼矛ヲ賜ヒ言ヨサシ給ヒキ」と記されてあります。これによりますと、御叡慮きはめて深遠にわたらせられ、まづ國の礎盤である國土から修理固成あそばされ、多くの島々をお創になつたことになります。かうした由緒の深い國家は、世界のどこ

にあるだらうと恐懼感激に堪へない次第です。

次に、「國ヲ生ミ竟ヘテ更ニ神ヲ生ミマス」とあります。そして多くの神々をお生みになつたわけです。それはすべての森羅萬象の神々で、今日わが國土を被つてゐる、洋々たる碧海、秀麗なる山川、五穀豊穰、魚介夥富をご司掌になる神々であらせられなかつたかと、恐々拜察申しあげる次第です。

次いで、天照大神、月讀命、須佐之男命をお生みになります。「伊弉諾命、大ク歡喜シテ詔リタマハク『吾ハ子生ミ生シテ、生ミノハテニ三柱ノ貴キ子得タリ』と、大へんお歡びになつたご様子が記されてあります。

次いで、天照大神は皇孫—瓊々杵命に三種の神器をお授けになり、「此ノ豊葦原ノ瑞穗國ハ汝知ラサン國ナリ。往イテ知ラセメセ、皇祚ノ隆エマサンコト當ニ天壤ト窮リナカルベシ」と詔されて、瓊々杵命は天降りますのですが、これは皆さまも十分ご存じのことと思ひます。この御詔勅の雄大無比、宏遠無窮、たゞ感激恐懼する外ないのです。今日、旭日の昇るやうな國家的盛運の淵源するところ、極めて遠く高いと申さねばなりません。

爾來今日まで——人皇神武天皇から數へてさへ三千年にわたるわけですが、その間、天照大神の御嫡系であらせられる天皇を御宗家として、身體的・有機的に發展して、萬國に比類ない眞の國家を生成し、今日の盛運途上に大きな巨足を踏まへてゐるわけです。

だから、私たち及び私たちの「家」は單なる個人的な私有財ではなく、「國家」の身體的な生活機關、たとへば、手・足・口・耳・目・鼻、或は内臓の肺・心・胃・腸・脾・肝等、それを形成する細胞なのです。そして「國家」の血液的・榮養的惠澤に浴しながら、それ／＼の職能において、精根のかぎり忠勤奉仕する——いはば小さき「國家」なのです。私たちは「國家」の身體的全たいに包まれながら、身體的全たいを背負ふものなのです。この關係を忘れてはなりません。

この有機的聯關の關係は、私たちの身體的生活機關を反省して見れば、何よりも的確に判然するわけです。私たちの身體的生活機關は、それ／＼の職能にありながら、常に全體的一者のために忠勤奉仕し、全體はまたそれ／＼の生活機關の總和的統一において、一の生命體的機能を生成し發揮するのです。この關係は相互扶助的であり、有機的であり、同

喜同憂的であります。

全體を忘れて絶対に個はなく、個を忘れて絶対に全體はないのです。この運命的な必然の相関と聯関は、生命體の身體的・精神的存在を強靱に意義づけてるものなのです。

音楽をきいて愉快なのは、耳だけではありません。身體全たいが愉快なのです。手や足に苦痛があり疾患があつては、それだけ愉快の度が遞減されるわけです。また耳が音楽をきいてるのに、身體全たいが寝入つて無關心の管はありません。他の生活機關もまたそれ／＼の職能と位置において、耳の聽覺に交響し階和して、そのまにまに生き動き、音楽をいやが上に愉快にしてるのです。この交響と階和の相関的統一が健全であり、またその度が高ければ高いほど、音楽が愉快なわけです。

今日、盛んに「鍊成々々」といふことも、究極は、身體的諸機關の相関的統一が、精強健全であらうことを期するものに外ないと思ひます。宮本武蔵が劔一本のために、彼の全生涯を捧げつくしたのも、身體的諸機關の相関的統一を劔一本に結集して、遺憾なからしめようとしたものに相違ないと思ひます。

また、身體的諸機關が如何に健全で、恙ない交響と階和の準備が高からうとも、耳そのものが粗笨で杜撰だつたり、疾患がちがつたりしては、やはりそれだけ音楽が不愉快となります。だから、耳は飽までも自分自身のためにも、また身體全たいのためにも愈々健全であり優秀でなければなりません。

今までは、音楽に耳だけが、或は喉だけが達者であればいゝと考へてゐましたけれど、それは、この身體諸機關の交響的・階和的な相関々係を知らず、また耳が常に身體全たいを基盤として、初めて機能づけられ、生命づけられてることを知らなかつたからです。それが今までの「自由主義」「個人主義」なのです。

如何に耳だけが、喉だけが達者でも、身體全たいの諸機關が、或はその一つだけでも、病弱であり不健康であつては、たゞ小手さき上手な音楽家になり得ても、天地を動かすて、いの偉大な音楽家とは絶対になり得ないのです。苟も天地を動かすて、いの偉大な音楽家とならうためには、耳が喉が偉大的に達者であると同時に、身體全たいが偉大的に健全であり優強でなければならぬのです。

これは、私たち國民と「國家」の間にもいへること、私たち國民は如何なる場合にも、國家を無視し蹂躪しては、絶対に生きられないのです。「生きられる」と思ふのは、この相關的有機關係の緊密さを知らないもので、すでに國家的身體の埒外に逃がれ出てるものなのです。それは國內に於ても異國民と同じで、國家としては雜物であり不純物なのです。國家生活の純粹性に茶毒となるものです。今まで「かうした異國民の如何に多かつたことよ」と言ひたいと思ひます。

それは、國家との不可分にある有機關係をすて、無機となり死となつてゐるもので、全く機械觀におちてゐるものなのです。私たち個が常に「國家」の身體的全たいを基盤としなひでは、絶対にその機能がなく生命がないのです。個の二三が死滅しても、なほ全體の生命はあるが、全體が死滅しては、個は絶対に全體と共に死滅しなければなりません。如何に自分だけが健全であることを主張しようとも、それは絶対に駄目です。一の悲鳴に過ぎません。

「親死して初めて親を知る」といふ言葉と「國家滅んで初めて國家を知る」といふ言葉

とさう大した差はないと思ひますが、有難いことには、日本の「國家」が未だかつて滅んだことがないのですから、その有難さが深刻にこたへないのだと思ひます。少しくは他の亡國民の生活的慘目さと思ひ見ればいゝのですが、それも他の身上と見て、考へちがひも出来るのだと思ひます。私たちが自分の身體を粗末にしてると同じなのです。恐ろしいことです。警戒したいと思ひます。

だが、機械はさうではありません。一部分が損傷すれば、それを取換へればいゝのです。また全體が死滅しても部分の健全なものは、他に利用し使用することが出来ます。だから、機械には殆んど全體の死といふものはありません。あるとすれば、個全部が揃つて使用に堪へない老齡に入つたときです。

だが、生命的な有機關係ある私たちにおいては、全體の死は直ちに個全部の死です。如何に一部分が健全であらうとも、それを取除いて他に利用し使用することが出来ません。むろん、外科的醫學の進歩は、今日多少のことは行つてゐますけれど、それも有機から有機へと生命あるうちに行はなければなりません。死人の一部分を生人の一部分となすこと

が出来ません。絶対に生から生へとおきかへなければなりません。それも或限度を越えては駄目です。

だが、機械はいつ如何なる場合にも。容易に取替ふことが出来ます。だから、自分さへ健全でありさへすれば、甲から乙へ、乙から丙へと渡り歩くことが出来ます。これが個人主義・自由主義の代表的な生活様式だと言つてもいいのです。

すなはち、今日は甲と結託して生活してゐるかと思へば、明日は早や甲を離れて乙と結託して生活する、そこに人間的な律義がたい節操もなければ、温かい情義もないといった生活態度なのです。唯あるものは、「自分だけを利益すればいい」といつた我利々々亡者の黒い影だけです。

これを外國の國際關係においても、はつきりと見る事が出来ます。今は戦争最中ですからさう動きませんが、今までは甲の國と手を握つてゐるかと思ふと、明日は早や乙の國と手を握つてるといふ形でした。殊に英國などはその手で生きて來たのです。

だが、日本だけは斷じてさうではありませんでした。律義の國であり、節操の國であ

り情義の國でした。その身體的な結合の高いこと、言語に絶するものがありました。死すとも盟契を斷たうとはしませんでした。私たち祖先が上御一人を大み親と崇敬し奉り、身をもつて忠誠申しあげたのも、この身體的な血縁關係の思想と諦觀からだつたのです。また畏多いことだが、上御一人におかせられても、私たち國民を眞の「わが子」のやうに御仁慈あらせられたのも、一にこの身體的な血縁關係の御思想と御諦觀からだつたと拜察します。まことにうまし、麗はしき國柄なのです。

私たち祖先の言葉に「忠臣二君に仕へず」「貞婦二夫に見えず」といふのがあります。節操高い肅嚴な感じさへする言葉ですが、この言葉からおして、如何に私たち祖先の生活が、有機的・身體的に厳しいものだつたか判るのです。涙をさそふ氣さへします。

一たび主君の身體として職能を奉じた以上、死をもつてこれに奉仕し、「主が死せば自分も死する」といふ有機的・身體的な至上限を示したものです。絶対に「再び他の身體とはならない」といふのです。殉死が許されてゐた時代では名實ともに殉死し、殉死が禁ぜられてからは、いはゆる「生ける屍」——浪人として、如何に慘目な日蔭多い生活を遂げ

てゐたか、皆さまも十分に想像されることと思ひます。

それでゐて、「二君に仕へる」ことを勧めるものがあれば、凜然として、「刀はさびても畜生とはならぬ」と、厳しくはねつけたものです。刀は武士の魂なのですが、その魂が腐つても畜生とはならぬといふのです。何と意氣の盛んな言葉でせう。それも「食ふか食はず」の浪人生活でゐながら、この言あることは、もう悲壯と言はなければならぬと思ひます。主りまさずとも、なほ死をもつてお庇ひ申してゐるのです。この肅嚴にうたれては、私にはもう言葉がないと思ひます。それほど私たちの祖先は、身體的な血縁關係の思想と諦觀が高かつたのです。よく自分の「身體」といふものが判つてゐたのです。

「貞婦二夫に見えず」も同じことです。一たび夫となり妻となつて一つの身體となつた以上、絶対に「再び他の身體とはならない」といふのです。まことに雄々しい嚴しい節操の高さだと思ひます。馥郁とした香高い一輪の蓮花でも見るやうな氣がします。婦徳の最も至れるものだと思ひます。この身體的な血縁關係の高き思想と諦觀あるが故に、如何なる困苦辛酸にも堪へ得るのです。日本の「家」はこの貞婦によつて支へられ、日本の「國家」

はこの忠臣によつて、堅持されて來たものと言はなければなりません。

日本道義の根本をなす「忠」「孝」「貞」の諸徳は、皆この身體的な血縁關係の思想と諦觀から發するものなのです。だから、一として社會的なものがないのです。すべて「國家」の身體的な關係におかれてゐるものばかりです。脈々と「國家」への動脈において、鼓動してゐるものばかりです。

だから、私たち及び私たちの「家」は、單なる私たち及び私だちの「家」ではなく、常に「國家」を背負ふ私たちであり、「家」であるのです。私たち及び「家」は、「國家」の身體内に包まれながら、「國家」を背負ふものなのです。そして同喜同憂的に呼吸し生命あるものなのです。

だから、お母さま方は、常に「國家」を背負つてゐることを泌々と身に感じ、その高き精神において、「家」の道を「まこと」にすれば、それで「國家」への忠誠となるのです。「家」の道を「まこと」にするとは、身體をもつて「家」の道を姿とし形とすることです。それが今日いふ實踐であり躬行なのです。「家」の道はすでに述べましたから、こゝ

では略します。

なほ、こゝで力説しておきたいことは、身體的職能機關の相助協力的な聯關々係なのですが、この關係は、私たちの身體内では極めて至妙に自然に行はれてゐますので、意識の抵抗がなく屢々忘れがちですが、この關係の重要さを忘れては、身體が持つて行けないのです。

たとへば、胃袋が病氣で困つてゐるのに、手や口が一向平氣で、ちやん／＼食べ物運ぶといつたことになりますと、それきり身體がつぶれてしまふのです。だが、私たちの身體では、さすがは神さまのご創造だけあつて、きはめて至妙精緻に同喜同憂的に出來てゐますから、ちつとの無理がなく道義的に置はしく行はれ、さうした無暴無茶は殆んどありませんけれど、純粹に身體的になり切つてない「國家」では、或は社會的・機械的に出來てゐる國では、随分それが多いのです。日本のやうに極めて理想的に出來てる「國家」でも、全ぜん無いとはいへないので。いや、大ありなところもあるのです。

今日、盛んに「統制々々」と叫ばれてゐるのは、それなのです。「國家」のうちに、社會

的・機械的な自分勝手の雜夾物・不純物が多くて、「國家」の身體的な生活機能を多大に阻害してゐますから、それ等を外科治療的に削り取り除きさつて身體的な生活機能を純粹に最高なものとなさうとするのが、いはゆる「統制」なのです。精神的にはこれを「鍊成」といつてゐるのです。

最も純粹で自然的な身體では、手が怪我をすれば體全たいがこれを同憂し、一日も早く恢復するやうに、あらゆる努力を拂ふのです。手が怪我して痛んでゐるのに、足が一向平氣で駆けずり廻つたり、體が靜養することを拒んだり——するやうな不徳義なことは、絶対にないのです。そこは飽までも同喜同憂で、相助協力的に道義高く行くのです。それでこそ身體がいつまでも持つて行けるのです。

今日、いや今日まで、日本では、上下の縦線的には、極めて理想的に申分なく行つてゐましたけれど、左右の横線的には、遺憾ながら理想的にうまく行つてなかつたのです。皆さまざま存じのやうに、眞の私たち身體は、立體的なものなのです。上下の縦線と左右の横線が、血となり肉となつて立體的に生成され合はなければならぬのです。

こゝに、人と人の一體化、「家」と「家」の一體化、町と町の一體化、村と村の一體化、會社と會社の一體化、工場と工場の一體化、役所と役所の一體化、あらゆるものゝ一體化が身體的に行はれなければならぬのです。これが組織化され機能化され生命づけられて、初めて完全無缺な「國家」體制―身體となるのです。一億一體の實現の可能もそこにあるのです。

どうぞ、お母さま方、一家の身體的一體化の完成は無論のことですが、お隣のお母さまとも温かくお手をつないで、一億一體の「國家」的身體への二環として、一日も早く出發していただきたいと思ひます。

二、職能と「家」

私たちの手は無數の手からなつてをり、足はまた無數の足からなつてゐます。耳・目・

鼻・口も、肺・心・胃・腸もまた皆さうなのです。無數の職能的一群が相關的に統一されて、一本の手となり足となります。肺となり心臓となり、胃・腸となります。耳・目・鼻・口もまた同じです。――（手・足・肺・耳・目など二つづつありますけれど、職能的には一つと見るべきです）――

で、これを一つの「家」と見るならば、大家族制の「家」なのです。だから、「家」には必ず「國家」生活に、必要で缺くことの出来ない職能を持つてゐなければなりません。働かない無職といふことは、絶対に許されません。必ず職能をもつて國家生活に聯關奉仕しなければなりません。

これは昔の氏族時代には、劃然と立派に行はれてゐました。すなはち、宮廷では、中臣氏の祖である天種子命と齋部氏の祖である天富命は、祭祀と政事に、物部氏の祖である可美真手命と大伴氏の祖である道臣命は、警備の職能につきましました。そしてそれは累代相つぐ世襲でした。しかも一族は大家族制に一群をなし、職能的に一體化されて、「國家」生活に聯關奉仕してゐました。

また、地方に縣・造の政事職能があり、農・工・漁の生産職能もあつて、それ等が渾然と一體化し、同様、大家族制に一群をなし、「國家」生活に聯關奉仕してゐました。それが今日までも、多少その面影を残してゐるのが部落なのです。

行政區劃なども土地の状況によつて區分したわけではなく、すべてが職能本位の部落別なのです。一切の行政・治安・裁判・教育などは、職能長である氏上―部落長の手によつて行はれてゐました。今の「國家」生活への税金なども、職能による生産品で納まれてゐました。

だから、昔の「家」では、その「家」の職能的動脈をとほして、「國家」生活に必要な、あらゆる行政・治安・裁判・教育などの行使が注がれ、またその動脈をとほして、「家」は「國家」生活に聯關奉仕してゐたわけです。

殊に政事は、いはゆる「まつりごと」で、祭政一致で行はれ、祖先を尊崇し奉祭することによつて、生活を統制し道義に精勵し、職能に恪勵ならしめたのです。それはまた同時に子弟への教育でもありました。

で、昔の「家」を今日でいへば、家族の休養的な生活本據でもあり、職能的な作業場―工場でもあり、行政的な役所でもあり、治安の警察署でもあり、善惡判定の裁判所でもありまた子弟教育の學校でもあつたわけです。だから、職能の範圍において、「家即國家」でもあつたわけです。今日でも明治大正の西歐文化に縁遠かつた僻遠の地方に行けば、その面影を残してゐる家が數多くあるわけです。

だが、大部分の「家」は、「國家」生活の發展と制度の變遷につれて、休養的な生活本據だけを残して、他は殆んど全部が他に移動されることになりました。むろん、農業とか小中の商工業は、その作業場を「家」に持つてゐるものもありますが、それも漸次他に移動される傾向にあることは否まれません。

だが、それだけ萬事が冷々と他人行儀となり、温かい家庭的な情愛がなくなり、理義一への厳しい機械のやうなものになりました。わけて明治・大正にかけて西歐の物質主義・個人主義がはびこるやうになりましたから、その傾向に拍車をかけて、いはゆる日本の「家」的血縁化の美風良俗が、哀れにも臺なしにならうとしました。私たちは、こゝで

大に考へなければならぬのだと思ひます。

もと／＼私たちの生活は、「國家」の身體的發展の一職能として存在し、「國家」の血液的・榮養的恩惠のうちに、「國家」と運命的な不可分の職能において聯關奉仕し、生きてゐるわけですが、「國家」生活が如何に多岐に精緻に分房發展しようとも、その根元を忘るべきでないと思ひます。

だが、果して今日の「國家」的職能機關が、その根元的な自覺と實踐の上にあるかどうか。私に言はせれば、甚だ疑はしいと思ひます。わけて、今日の生産的職能を擔當してゐる産業會社・工場、それに伴ふ商品業は、「國家」生活に必要で不可缺の生産職能として、その自覺と要請の上から誕生したものではなくて、一に利潤だけを饑鬼のやうに追ひ求める物質的資本主義から誕生したものでないかと思ひます。それがどれほど多く「國家」生活に害毒を流して來たか知れないのです。正純であるべき「國家」の身體的發展が、今日のやうに畸形化して來たのは、一にそれ等の生産業が「國家」を忘れ、利潤一天ばりに氣狂ひじみた生産行爲に出たが故でないかと思ひます。

その證據には、支那事變から大東亞戰爭にかけて、高度國防國家の完遂上、最も「國家」の腦漿をしぼり、その手を煩はしてゐるものは、この生産職能方面の統制・整理ではないかと思ひます。資本主義・自由主義時代の滿潮的な波頭にのつて、「國家」生活の意志など全く考へず、たゞ利潤だけを唯一の餌として、無茶苦茶といひたいほどに、會社・工場・商品業が續立し狂奔したのです。

だから、一たび「國家」の生活意志によつて、戰爭のやうな難事業をなさうとする場合、それ等が手足まとひとなり、枷かたとなり、行動の自由を拘束し牽制し、敵よりも恐ろしい獅子身中の蟲となるのです。しかも、それが病膏盲に入つてると見えて、米英の外敵は割合に簡単に片づきましたけれど、内なる蟲は今日もなほ頑強に抵抗して、快く轉業を肯んぜないばかりか、買溜、賣惜しみ、闇賣買などとなつて、全くゲリラ戦に出てゐるのです。この内なる頑敵を屠らない以上、超長期的な高度國防國家の完成も覺束ないのです。

高度國防國家を色々とむつかしく考へてなされるかも知れませんが、これを簡単にいへば、天下無敵未だかつて敗れたことのなかつた、劔道の達人―宮本武藏の精神と身體を、

そのまゝ「國家」の上におけばそれでいいのです。最も理想的な高度國防國家となるのです。

だから、宮本武藏が遂げたほどの高い心身の修練と錬成を、「國家」がすべての生活機關の上に課せなければならぬのです。今、生産職能の會社・工場、それに伴ふ商品業の整理・統制を言ひましたけれど、そればかりでいけないのです。あらゆる「國家」の生活機關から、障碍となるべき雜夾物・不純物を拂ひのけ除き去り、純眞無垢、鏡のやうな明透した心境と境涯に導き入らねばならぬのです。

だから、「國家」の生活意志によつて整理統制された、それ／＼の職能機關は、まづ「國家」の身體的な一生活機關として新しく誕生し、いぶきを吹き込み、相助聯關の有機關係において活動を開始しなければなりません。それには、まづ、會社・工場・商店・官廳・銀行・學校が、それ／＼「國家」の身體的な職能において、一群の大家族制の「家」とならなければなりません。

だが、今までのそれ等のものは、大家族制の「親子」の關係にある「家」ではなくて、

たゞ物質的な權利義務の上に立つ雇傭關係にあるものなのです。だから、會社主・工場主・商店主・等々は出来るだけ優秀な會社員・工員・商店員・等々を出来るだけ安い給料で雇ひ入れ、出来るだけ長時間の勤務を強いようとし、雇はれた方の社員・工員・店員・等々は、自分の優劣は棚にあげ出来るだけ高い給料で、出来るだけ短時間の勤務を要求しました。その間の折合ひはいつも敵同志で、何かと利益問題をからんで唯み合ひばかりしてゐました。

だから、そこに人間的な温かいゆとりなどあらう筈がなく、いつも敵視と猜疑と緊張と警戒の白々しい白眼が光るばかりで、冷々と冷凍庫のやうな空氣におち込んで行きました。それでは生産能率が絶対にあがる筈がなく、いつも加速度的に低下するばかりでした。かうなつては利潤になる道理がなく、経営主は利潤が第一ですから、色々と厳しい規則を設け、強力な監督の鞭を振ふより外ありませんでした。それでも能率が高昇したと思ふのは上面^{うへづら}だけのことで、内質的には低下の一途をたどるだけでした。

私たち人間が、規則や監督だけで最高に能率をあげてくれれば、大變に有難いのですけ

れど、さうは簡単に問屋が卸しません。それで苦勞するのです。だが、これは眞の「家」となつて、初めて能率が最高に上昇して來るのです。「家」とは「親子」の温かい情であり、身體的・血液的に人間の深い關係に入るので、規則の厳しさがなくても、監督の白い眼が光らなくても、自主的に自分が自分を督勵して、惜しみなく精根を仕事にぶち込むのです。

これを疑ふものは、日本の「家」を温床とする生命的な高い道義を疑ふものであり、究極は、日本「國家」の美風・良俗を疑ふものであらうと思ひます。少しくは、今の會社主・工場主・官廳主・銀行主・學校主の人たちは、日本道義の生命的な高い根元的なものが、どこから培はれ、どこから築きあげられて來たものか、省察討論して見るが、いゝと思ひます。

「忠僕二主に仕へず」とか「貞婦二夫に見えず」とかいふ、これほど道義の高い生命的な、しかも能率百パーセントの思想諦觀は、どこから養はれ、どこから育て上げられて來たものか。少しくは研究省慮して見るが、いゝと思ひます。

更に「親分・子分」といひ「兄分・弟分」といふ血盟的な道義の根元も、どこから芽生え、どこから修理固成されて來たものか、少しくは考想思慮して見るが、いゝと思ひます。私が會社・工場・官廳・學校・等々の「家」化すべきことを主張するのは、一に「國家」の身體的體制を精強無比に整へようためですが、單に利潤をあげ能率をあげよう上からいつても、絶対にそれ等の日本道義を省察討論することは、等閑に附すべきでないと思ひます。なぜかならば、それほど高い能率の上昇法がないからです。物が生命的なほど能率の高いことはありません。

次に、「家」は「國家」のうちに包まれながら、「國家」を背負ふものなのですから、お母さま方は「家」において、子どもを幼少なころから、「國家」的な大きい考で訓練し陶冶し鍊成しなければなりません。

たとへば、「職能」のことですが、子どもながらも「家」におけるそれ／＼の職能を分擔させ、その職能において「家」生活の完遂に聯關奉仕させなければなりません。お部屋のお掃除は花子さんに、玄關からお庭のお掃除は一郎君にといった具合に、責任もつてや

らせるのです。或は鶏や兎を世話させることも一案だらうと思ひます。

この「責任もつて」といふことは、職能を完遂して行く上において非常に大切なことですから、杜撰ゴツランに中途半端な仕事振りはさせないやうに警めなければなりません。全への悦びある責任感、責任感といふよりも、むしろ光榮感が、自分が自分の勤勞を督勵し、仕事を工夫し改良し創造して行く根柢をなすのですから、責任の叱責追求といふよりも、常に悦びある光榮感に訴へて、善導して行かなければなりません。私たち祖先の責任感が「自刃」となつてゐることを理解させなければなりません。

「家」が金持で饒かであり、婢僕の手が多いの故をもつて、子どもを無職の状態におくことは、絶対に「國家」的ではありません。「國家」への聯關奉仕は、絶対に職能をもつて爲さねばならぬことを、幼少な子どものころから、生活的・實踐的に理解させておかねばならぬと思ひます。

そして、やがて子どもの天稟的な特能特質を發見し、その方向への本格的な職能完成に努力させなければなりません。

三、「家」・「國家」と社會

日本の「家」或は「國家」は、屢々述べて來ましたやうに、身體的一體感の思想・諦觀の上に立つものです。父母—夫婦の關係にしましても、兄弟弟妹の關係にしましても、親子の關係にしましても、「家」と「家」の關係にしましても、畏多いことですが、私だち臣民と上御一人の關係にしましても、一にこの身體的一體感の思想・諦觀の上に立たないものはないのです。

だから、そこには誰かれの區別もなく、上下左右の隔てもなく、また權利義務の主張もありません。すべてが近親的な一體感の思想・諦觀のうちに、融け込んでしまつてゐるので、これが日本の「家」・「國家」における特質なのです。

だが、「社會」となりますと、さうは行きません。そこに誰かれの差別があり、上下左

右の隔てがあり、権利義務の主張があります。「他人行儀」といふ言葉がありますが、それは正しく社会でいられる言葉で、日本の「家」「國家」では「水臭い」といつて非議される言葉なのです。日本の「家」「國家」には、他人といふものがあらないのです。身内のものだけです。他人のゐるのは「社會」だけなのです。

「人を見たら敵と思へ」といふ言葉も、いつの時代から出来たか知りませんが、それも「社會」においてのみ初めて言はるべき言葉で、日本の「家」「國家」では一人の敵もありません。すべてが身内なのです。わが身内なのです。だから日本の「家」「國家」は、飽までも「家」「國家」で、「社會」ではないのです。これは大に注意しなければならぬことだと思ひます。

明治大正にかけて、物質的個人主義の西歐文化が輸入されて以来、多大に日本の「家」「國家」が社會化されて来たことは否まれません。そのために、多くの日本的な尊いものを失つたと思ひます。だが、今更それを悔いたところで詮ないことで、今後大に努力してその失はれた多大なものを挽回したいものだと思ひます。

で、「國家」のうちに「社會」といふものが介在することは、まだ「國家」が眞の身體的な體制になり切つてない證左」だといふことになると思ひます。つら／＼日本の歴史を案じて見ますに、昔「幕府」といふ密雲が色濃く、私たちの「家」の上に覆ひかぶさつて、「國家」の大家長であらせられる上御一人の御威光を、一體感的に身近に仰がせませんでした。いはゆる「國家」の眞の身體的な體制となることを阻んでたのです。

更に明治大正にかけては、西歐文化から派生した「社會」といふ密雲が、また／＼「國家」の身體的な體制を阻み分離させ、私たち個人としては、宏大な御稜威によつて、上御一人に強靱におつながら申しあげてゐるが、個人と個人、「家」と「家」の、横の聯繫紐帯が完全に身體的に出来なかつたのでないかと思ひます。

幕府はまだ一の行政政府でありましたから、日本古來の大家族的な組織と體制に、がつちりと内部は固められてゐました。だが、その政治のやり方が社會的分離的だつたのです。すなはち、藩と藩は絶対に一體化が許されず、藩もまた部落までの一體化は許しませんでした。却て部落と部落は分立させ對立させ

るといつた遣り方で、部落と部落の喧嘩騒ぎは、公然と許されてるやうな形でした。つまりそれを利用しての藩政であり、幕政だったので。しかも上御一人の御存在をひた隠しに隠さうとしましたから、全國が大家族的な一體化に盛りあがつて來なかつたのは、當然すぎるほども當然だつたのです。

更に明治ご一新府となつて幕が倒れ、藩が廢されて、密雲一時に拂はれ、晴れごと上御一人の御威光を身近に泌々と仰ぎ申されたかと思ふと、まだ全國的に「家」と「家」の聯繫一體化が遂げられない前に、物質的個人主義の西歐文化が輸入されて、その過信的迷蒙と中毒にかゝり、「社會々々」と盛んに言ひ出して來たのです。

もと／＼「社會」といふものは得體の知れないもので、頭もなければ尻つぼもなく、在るやうでなく、無いやうである、動くやうで動かない、動かないやうで動く、全く掴みどころない代物なのです。まあ、私たちの本能的・動物的な集團のやうなものです。

だから、得て勝手であり、わがまゝであり、我利々々であり、自由主義であり、個人主義であり、弱肉強食であり、まあそれ等の一切のものが、百鬼横行・夜叉濶歩の姿である

のが社會なのです。

それを「國家」は、法律といふ金網や鐵條網で取締らうとしてゐますけれど、なか／＼そんな生やさしいもので取締れる筈のものでないのです。法律以上に裏に裏をかくした、か者なのです。梃で賣らせれば梃の量り方をこまかし、目方で賣らせれば水をぶつけ砂をまぜて目方をこまかすといつた、常に法律以上に抜け目なく立働くのが社會なのです。

こゝに西洋の「法治國」といふものが、どんな形相すがたのものであるか、十分にご理解が行かれると思ひます。「法治國」といふのは、社會のさうした本能的・動物的な罪惡を、法律だけで抑制し取締つて行かうとする國で、——（敢て國家とは申しません）——國と社會がいつもシーソーのやうに、「一方が上れば一方がさがり、一方がさがれば一方が上る」といつた、法律をはさんで上下の唾みあひをやつてるやうなものです。

日本も古來傳統の麗はしい「道治國」をすて、明治大正にかけて急速に、「法治國」と變形し移行したことは否まれませんが、それが「社會」といふものゝ介在を認許したことになつたのです。一時的な現象とはいへ、遺憾なことでした。

「社會」はそれ自體を謳歌するのですから、「國家」といふものゝ存在はなく、政治の上でも國家政策といふべきところを、社會政策といひ、しまひには「社會主義」などと言ひ出して、道治國の日本までを赤化しようとしたのです。その殘滓がまだ今日、そこに見られるのです。

だから、私だちは一日も早く温かい祖先の懷にかへり、祖先が悠久三千年の久しきにわたつて、刻苦精勵よく築きあげて來た身體的「國家」體制の道義を究め、身に體し、これがいやが上なる顯彰に努力しなければならぬと思ひます。そして「社會」といふ思まはしいものゝ存在を、無くしたいものだと思ひます。

それには私だちの「家」、「國家」の精神を擴延し、一億同胞が眞に血縁化し、「家」と家の一體化的な聯繫脈絡をはかり、同喜同憂の眞の身體的な「國家」體制となさねばならぬと思ひます。そこに私たちは多大に情の饒かな人間となり、一切のものを「わが子・わが身」と血縁化し包攝することが肝要だと思ひます。こゝに多大にお母さま方の性格が必要とされる所以です。——（なほ詳しいことは次項で述べます）——

四、母性者——道義の渴求

いはゆる普通にいふ建物的な「家」ならば、數限りなく存在してゐます。東京のやうな大都市になりますと、軒並みおしに「家」々々といつていゝと思ひます。日本に人口がざつと一億といひますから、一家五人平均と見て、二千萬の「家」があるわけです。

だが、一として人間的な温かい血のかよつた近親味あるものとはなく、何れもが冷凍庫のやうに冷たいものばかりで、淋しいこと限りあません。この淋しさは「家に母がゐない」といふ感じです。母ほど温かく泌々と近親味を與へてくれるものはありません。「家に母があることは、巨萬の富よりも嬉しいことだと思ひます。「母あるが故に家がある」といつても、敢て過褒な言葉でないと思ひます。母あるが故に、「家」は私たち人生のオアシスとなるのではないかと思ひます。

だが、一步「家」の外に出ますと、いはゆる「社會」で、熱い炎天の眞夏でも、寒風朔々とし吹きすさんでるやうな気がします。行きあふ人々も、それは私たちの近親的な温かい同胞ではなくて、犬・猫・車などと行きすつたときの感じと、ちつとも違つてゐないやうです。

女の人々にも温かいまろやかな女味のあるものはなく、たゞ「社會」の荒風に負けまいとする固い緊張と緘黙に尖つてゐるだけです。「家」にゐては温かい母でも、一步「社會」に出ると、その麗姿を失ふものと見えます。わけて男の人たちと來ては、煌々と焼けて、觸れれば手も怪我しさうです。だが、その焼け方も熱いのではなく、却て氷のやうに冷たい焼け方です。熱も極限に達しますと冷たいものと見えます。時には悲壯な感じさへします。すべてが男性一面に乾ききつてゐる気がします。しまひには發火點に達するかも知れないと思ひます。

このごろ東京では、「親切に致しませう」といふことが叫ばれて、街頭はむろんのこと、電車・バス・等々に大馬力の宣傳ですが、大變適切な運動だと思ひます。炎天つゞきの喘

ぎに一慈雨を恵まうとするのです。これが「母」の性格だと思ひます。親切は「母」の姿なのです。

今や「母」の姿を求めてゐるものは、「家」のうちばかりではありません。街頭にも電車・汽車・バスのうちにも、會社・工場・銀行・官廳・學校のうちにも、その他あらゆる社會面に、「母」の姿を求めて止まないのです。これは「社會」が「家」化し、「國家」化しようとする胎動とも思はれて、大變に嬉しいのですが、それだけお母さま方に期待するところが多大なのです。

「母」の姿とはこれ「道義」の姿なのです。「道義」といふものは、「母」の親愛的な温かい情がありませんと、絶対に行はれないものなのです。「道義」を理窟だけで行へるものと思つてゐる人があるかも知れませんが、絶対に理窟だけで行へるものではありません。母の親愛的な情が「道義」に温かく吹き込まれない以上は、絶対に私たちの行爲となるものではありません。

「理窟」といふものは常に機械觀の上に立ちます。だからそれ自體に實踐の動力といふ

ものがありません。機械にガソリンか電力を通じなければ運轉しないと同じやうに、「道義」に母の親愛的な温かい情を吹き込まなければ、行爲の實踐とはなつて來ないのです。だから、尊いものは「母」の姿であり情なのです。

今日、女の人たちも自分の女性的な柔か味・うる味といったものを虐げて、男性一面だけに冷え込み、男の人たちは益々男性一面に焼けて却て冷々と尖つてゐる状況は、「家」のうちには眞の「母」がゐないことを物語り、「家」の外はまだ「國家」の温かい身體的な體制になり切らず、全く社會的・動物的な機械觀におち込み、人間として生きられない焦燥と不安に、苛立つてゐるのではないかと思ひます。

だから、私たちは須らく「母」の温かい情にかへり、今までに多大に失はれて來た、同喜同憂の身體的な「道義」に強いいぶきを吹き込まねばならぬのです。むしろ男の人たちも「母」からうけた血を内包してゐる筈ですから、その血が描く「母」——道義を取り戻さねばならぬのです。女の方はその性がすでに母の姿なのですから、「母」の姿を取り戻すのに、さう難儀はないと思ひます。だから、まづ率先して「道義」に高いいぶきを吹き込

み、荒れすさんだ「社會」を道義化して、同喜同憐の「國家」的身體へと誘つて頂きたいと思ひます。それはつまり「社會」を「家」となすことだと思ひます。

或はまた「科學が社會を統一するものだ」と思つてゐる人があるかも知れませんが、それも絶対にさうではありません。科學は如何に高遠であらうとも、それは飽までも理なのですから、科學自體に統一の機能や動力はありません。やはり「母」の親愛的な温かい情によらなければなりません。これはつまり「宗教」の姿なのです。だから、科學は「宗教」によつて統一され、初めて生き物となります。「道義」の實踐も深い「宗教」心から來てゐるものほど強靱なのです。

科學萬能だつた時代には、科學が一切を解決するものと迷蒙してゐました。だが、科學もとう／＼破綻を見せたのです。そしてまだ今までの科學を統制する、新しい「宗教」が發生してないのです。それで今日の戰爭を來たしてゐるのです。

だから、私たちは私たちの「宗教」——「母」の姿にかへればいゝのです。「母」の姿を一切を解決し、統一する眞の「宗教」なのです。それには「國家」の身體内から「社

會」といふ雜夾物を取去らねばなりません。「社會」の雜夾物とは、本能的な個人主義であり、我利々々亡者の物質主義であり、得て勝手なわがま主義を指していふのです。

そして「家」となり、更に大きな「家」となり、また更に大きな「家」となりして、最も偉大な「國家」の身體的體制を、全國的に構築しなければならぬのです。もう私たちは「家」から外に出ても、他人行義的な冷たい緊張と警戒の念をすて、ほだく／＼と純な温かい氣持で接し、助けあひいたはりあひ、お互に血縁的な麗はしいもので抱合はなければならぬのです。そこに一億一體の「國家」的身體的體制も整ひ、最も理想的な「高度國防國家」の體制も完成の緒につくのです。

五、郷土神

私たちは常に現在の一點に立つものなのですが、この現在の一點に立つて、過去の質量に値するだけの未來に生きることが出来ます。それは丁度、天平棒に過去と未來の荷物を擔つてゐるやうなものです。

過去の荷物が重ければ、それだけ未來の荷物を重くしなければなりません。過去の荷物が非常に軽く少いのには、未來の荷物だけが非常に重く多量だといふわけには行きません。そこは絶対に平衡と統一されねばなりません。私たちは常にこの物理に生きるものです。だから、私たちの過去の質量が大であればあるほど、また「大である」と意義づけられ信仰されよばされるほど、未來に大きな希望をもち勇み立つことが出来ます。こゝに來て私たちの過去に、悠久三千年の光輝ある歴史あることは何と嬉しいこととせう。私たちはそれだけ未來に大きな希望を持つことが出来る、勇氣百倍することが出来るのです。

私がさきに「第二章家の道、八祖先への道」の項において、「私たちは現在に行詰まれば過去にかへるものだ」といひましたが、「現在に行詰まる」といふことは、「これ以上未來がない」といふ、生きられまい絶望に立つてることなのです。それは同時に過去が消

先失せてることになります。「過去が消え失せる」とは、過去を侮蔑し、過去に無意義を感じ、何等の人生的榮養料を酌み取り得ないことです。——(さういつた時代も私たちの過去にはありました)——

だから、再び過去にかへり、過去に新生命的な意義と力を見出すことです。それが出来れば出来たゞけ、未來に生きることが出来ます。いはゆる現在の行詰りさを打開することが出来ます。そこに歴史の有難さがあるのです。この有難さから祖先尊崇の精神が生まれます。だから、祖先がないことは絶望に近い淋しさだと思ひます。この意味において、私たちのやうに偉大な祖先を持つものは、どれほどに祖先に感謝しても足りないのです。

また、過去の實象を現在において見得ることは、如何に嬉しいなつかしいものでせう。それによつて限りなく過去の追憶が行はれ、慰められ、激勵されるか知れないのです。それはやがて未來への發展的活力となることは無論です。

「郷土」とは生れた土地のことなのですが、郷土の自然景象・人事のすべてが、これ私たちにとつて、過去の追憶を孕んだ實象なのです。だから、無精に嬉しいなつかしいもの

です。一木・一草・一鳥・一獸の數々に至るまで、私たちの過去の血であり、肉であり姿であり、形なのです。何人かこれを粗略に取扱ふものがありませうか。

「偉大な自然は偉大な人物をうむ」とは、よく言はれます。それはその通りだと思ひます。なぜかならば、偉大な自然は永遠に私たちの過去の實象となり内容となるからです。永遠にわたつて私たちの未來を示唆し、展開し、慰め、激勵します。私たちは必然に偉大とならざるを得ません。

この意味において、私たち日本における自然景象の、恵まれた多大なものがあることに感謝しなければならぬと思ひます。山川秀麗、碧海洋々、花麗はしく鳥また美し、これ等の一切がすべて、私たちの過去の内容となり實象となるのです。

私たちがもつ過去の内容と實象から、富士山を取り去り、鶯を啞にし、櫻を除き、雪を消えさせたら、如何に内容と質量のない淋しいものとなるか、想像するだに堪へがたいことだと思ひます。したがつて、私たち人間の性格も變つて來ることを覺えるでせう。それほど自然景象といふものは、根強く私たちを支配してゐるものなのです。

だから、私だちに富士山のあることは嬉しく、春のさまがけ魁に鶯の囀ることも嬉しく、霞たなびく春の野に雲雀の唄をきくもよく、櫻花爛漫、春宵値千金、よくも私たち祖先は言つたものだと思います。これ等の詩情と雅懐はみな私たちの過去の内容となり、質量となるのです。その他、夏・秋・冬の折々における景象と詩趣の豊さ、多岐さ、複雑さ、恵まれた自然の有難さに感謝せずにはゐられないと思ひます。

それ等の「自然」といふものは、私だちの諦観の仕方と深さ高さにおいて、無限に酌みとれる内容と質量あるものなのです。今日は今日で、明日は明日で、全ぜん異つた内容と質量を持つものです。それほど自然の教訓といふものは偉大なのです。

だから、この恵まれた自然の郷土に生ひ立ちながら、なほ「偉大になれない」といふならば、私たち自身の諦観の拙悪と深さ高さの低浅を物語つてるものなのです。「猫に小判」といふ言葉がありますが、この自然、この景象のうちにあるながら、なほ「猫に小判」の情なさならば、よろしく生を投げうつべきだと思ひます。「何の顔あつて自然者に見えん」と言はなければなりません。

だが、この點、私だちの祖先は、しごく敬虔であり、心からの赤誠を自然者にさしげて敬崇至らざるなき慎ましい態度を持してたと思ひます。自然者に歸依し隨順し、自然者を神と崇信し奉つて、諦観きはめて深く高きを示してたと思ひます。悠久三千年の歴史ある敢て故なきでないのです。

この歴史をまた私たちの過去として繼承してゐる私たち、この恵まれた自然を絶対に粗略にすべきでない、それは祖先に對しても申しわけないことだと思ひます。

鬼も角、この恵まれた自然と歴史あつてこそ私だちは未來永劫に生きられるのだと思ひます。壽ぐべきはこの自然、讚ふべきはこの歴史だと思ひます。

で、この郷土の中核をなすものは、「母」なのです。「母」の偉大は過古を益々偉大ならしめる中核であり、また電源地でもあるのです。「母」の弱小は決して過去を偉大ならしめるものではありません。この點、お母さま方は猛思三省していたゞきたいと思ひます。「偉大な母は偉大な子をうむ」とは、偉大な「母」が、「子」の生活的動力であり電源地でもある過去のの中核に、偉大な存在を加へるが故です。だから、お母さま方の存在は

たゞ單に自分一個の存在ではなくて、それがやがて子の存在ともなるのです。輕々に自分を取扱つてはならないと思ひます。自重して頂きたいと思ひます。

次は「家」です。「家」の存在もまた輕々には取扱はれません。むろん「母」の偉大な「家」としての偉大でもありますが、父並に兄弟姉妹の存在も決して粗略には出來ないのです。「母」についての過去の質量となり内容となります。だから、「家」としての生活内容は、「子」の全生涯を支配する根柢となり基盤となります。輕々しいものではないのです。

次は、いはゆる普通にいふ郷土——その邑です。この色の自然と人事は、また私たち過去の最も豐饒な内容となり質量となります。

お宮の森の亭々たる一本の銀杏の樹、野邊の辻に立つ簡素ではかなげな姿の地藏さま、茸狩り栗拾ひに絶えず上つた山崖の面影、水浴び菱取りに餘念なかつた池の水の感觸、太郎・五郎・花子・壽子の悪戯友だち、それからそれへと追憶の花となり、懷舊の實となる自然・人事の一切は、すべて私たちがもつ過去の内容と質量となります。

だから、邑の自然・人事もまた粗略には出來ないのです。それが偉大であればあるほど私だちもまた偉大となる内容と質量を持つものです。一木・一草・一鳥・一獸も粗末には

出來ません。悪戯友だちも決して悪いものではないのです。

更に、郷土は擴大されて、村となり市となり、郡となり、府縣となります。更に擴大されて、外國に對しては「日本」が郷土となります。これを行政區劃的に圖で示せば、上のやうになります。

だから、私だちは、郷土を時間的・歴史的に空間的・地域的に一つの過去として、蝸牛のやうに背負つてゐるものと見なければなりません。それはまた、祖先累代にわたつて、生活的・血液的にもさう訓練され陶冶され



てゐますから、郷土は精神的ばかりでなく、身體的にもさう規定され規制されてゐていつていいのです。これ郷土が私たちの性格を決定する所以です。

私は石川縣の出身なのですが、石川縣人の性格的規制の基調として、三つの大きなものがあると思ひます。一は白山の靈峰的存在、一は日本海の荒神的存在、一は前二者の間にかもされる四季折々の悪天候、わけて冬季の暴風雪の苛烈なさいなみ、この三つです。

皆さまのうちにご存じの方もあると思ひますが、東海道線の明るい朗かな空氣に比して米原から一步、北陸線に入りますと、山また山で隧道の多い關係もありますが、晝なほ小暗い陰慘な重い空氣が、車内を限なく占領します。それが福井驛あたりで少しく明るくなり更にまた一つ隧道をくゞつて大聖寺驛に出ますと、もう石川縣なのですが、車窓の右手には加賀平野が廣々と展開し、初めて夜が明けたやうな軽い明さを持ち込んでくれます。そして右手の加賀平野を越えた南から東にかけて縣境に、いはゞ飛驒高地の西裏側なのですが、蜿蜒と白山連互の山々が、大きな波が波うつやうに波うつてゐるわけです。

その連互の總帥として、いはゆる白山が標高九千尺に近い巨體を、雲表に聳立させてゐる

わけです。一年中の大部分は、北國特有の密雲におほはれて、その全容を現はすことは極稀です。それがまた石川縣人の性格を規定してゐるやうです。

すなはち、石川縣人はなか／＼にその本心を現はしません。いつも數歩遠のいて正體を密雲でつゝみ、なか／＼につかませません。だが、その正體は決して悪いものでなく、一度つかめばなか／＼に眞身で誠實で、日一日とその持味を發揮して行き、やらせば何でもやれる實力があり、末頼母しいのですけれど、それが今申したやうに、「おいそれ」と手取り早く來ないで、嶮しく取つきにくい難點があるのです。だから、見す／＼好運を取逃がす場合も多く、短時日の交際だと眞價を認められないで終る不運もあるわけです。だといつて、それを後悔してもゐないやうで、そこは宗教的に諦觀の度が高いといひませうか悪くいへば圖太いところもあるのです。

だが、白山は一年のうちに何度か晴れ／＼と、その全容を見せるときがあります。その容は富士山のやうに秀麗ではありませんが、何ほどか男性的な嶮しさのもので、崇嚴そのものゝやうな、手をあはせて拜みたい敬虔な氣持を誘ひます。野良に立つお年寄りなど、

てゐますから、郷土は精神的ばかりでなく、身體的にもさう規定され規制されてゐていゝのです。これ郷土が私たちの性格を決定する所以です。

私は石川縣の出身なのですが、石川縣人の性格的規制の基調として、三つの大きなものがあると思ひます。一は白山の靈峰的存在、一は日本海の荒神的存在、一は前二者の間にかもされる四季折々の悪天候、わけて冬季の暴風雪の苛烈なさいなみ、この三つです。

皆さまのうちに存じの方もあると思ひますが、東海道線の明るい朗かな空氣に比して米原から一步、北陸線に入りますと、山また山で隧道の多い関係もありますが、晝なほ小暗い陰惨な重い空氣が、車内を隈なく占領します。それが福井驛あたりで少しく明るくなり更にまた一つ隧道をくゞつて大聖寺驛に出ますと、もう石川縣なのですが、車窓の右手には加賀平野が廣々と展開し、初めて夜が明けたやうな軽い明さを持ち込んでくれます。そして右手の加賀平野を越えた南から東にかけて縣境に、いはゞ飛驒高地の西裏側なのですが、蜿蜒と白山連互の山々が、大きな波が波うつやうに波うつてゐるわけです。

その連互の總帥として、いはゆる白山が標高九千尺に近い巨體を、雲表に聳立させてゐる

わけです。一年中の大部分は、北國特有の密雲におほはれて、その全容を現はすことは極稀です。それがまた石川縣人の性格を規定してゐるやうです。

すなはち、石川縣人はなか／＼にその本心を現はしません。いつも數歩遠のいて正體を密雲でつゝみ、なか／＼につかませません。だが、その正體は決して悪いものでなく、一度つかめばなか／＼に眞身で誠實で、日一日とその持味を發揮して行き、やらせば何でもやれる實力があり、末頼母しいのですけれど、それが今申したやうに、「おいそれ」と手取り早く來ないで、嶮しく取つきにくい難點があるのです。だから、見す／＼好運を取逃がす場合も多く、短時日の交際だと眞價を認められないで終る不運もあるわけです。だといつて、それを後悔してゐるやうで、そこは宗教的に諦觀の度が高いといひませうか悪くいへば圖太いところもあるのです。

だが、白山は一年のうち何度か晴れ／＼と、その全容を見せるときがあります。その容は富士山のやうに秀麗ではありませんが、何ほどか男性的な嶮しさのもので、崇嚴そのものゝやうな、手をあはせて拜みたい敬虔な氣持を誘ひます。野良に立つお年寄りなど、

鐵の手をやめて、いとも敬念に合掌してゐるのを見受けます。

更に、冬の純白な雪衣をき、太陽の射光を全容に浴びての崇厳さ氣高さは、たしかに私たちに口を開かせません。押つぶされさうな異常で偉大な威壓です。大地に平伏する外ありません。世にこれほどの恐ろしいものがあらうかと思ふ位です。

この威壓が、私たちの性格に非常に強い圖太いものを與へてゐると思ひます。七ころび八起きの忍耐心と、どんな悲境におちるとも挫けない堅固な意志、そんなものが築かれてゐるのではないかと思ひます。

皆さまもご存じのやうに、石川縣は佛教の盛んなところですが、さうした佛教の入り込む畑が出来てゐたのも、この白山の多年にわたる靈降的訓練と陶冶によつたものでないかとも思ひます。

次に、日本海ですが、碧洋として一物の遮るものもなく、視界のかぎり廣大無邊で、碧い油を流したやうにきら／＼光つて天涯につゞいてゐます。だが、かうした莊重な和平的な日和姿は、白山と同じやうに單に數へるほどしかなく、大抵一里ほども遠方から波頭

に白々と怒りを見せて、岸邊に怒濤の一時に崩れるやうに、凄しく飛沫をあげて投げつけてゐます。

更に、荒天ともなれば天地、冥怪悽愴そのものです。これが午前の平和な日本海かと思ふ位です。かうなると、午前に漁に出てた舟はなか／＼に岸邊に近寄れません。舟は手のとどくところまで眞近に來てゐるのですけれど、波の崩れがひどいので岸に近づけないのです。

陸の者は聲をかぎりに叫んで焦燥に苛立つてゐるのですけれど、どうすることも出来ません。舟はみす／＼波にのまれて行きます。そして十中八九は遺骸となつて叩き上げられます。それがそこに見てゐての慘状ですから、叫喚・號泣・狂態、目もあてられません。中には遺骸が上らないのもあつて、その搜索に一週間はかゝります。

だが、これも晝ですから被害も少いのですが、夜だとその被害は倍加します。岸邊に焚く篝火の凄慘なと言語に絶します。目に涙ないものはありません。あそこ／＼に悲命的な叫喚、怒濤の崩れよりも身にこたへます。そして翌くる日は素知らぬ顔で晴れあがると

きがあります。惨憺たる光景は却て深刻に眺められます。

かうした苛烈な天然のさいなみが、如何に私だち石川縣人の性格を規定して行くか。大略はご想像がつくと思ひます。どうしても宗教的ならざるを得ないので。

更に、冬です。これがまたひどいのです。まづ暗陰にドス黒く曇つた壓迫の多い空気が、先驅のやうにやつて來ます。それに引きつゞいて霰が來ます。寒氣が一入身にしみまします。暗さが、刻一刻と日暮れのやうに増します。「今夜は思ひきり降るんだぞ」と豫感するに十分なけはひです。そのまゝ夜にはいります。

夜は深海の水底におちたやうな靜寂さです。全く死の世界です。風はありません。滅入りさうです。たゞ後方の竹籜に竹の割れる音が悲壯にひびきます。靜寂の中の響きといふものは、一層靜寂の度をますばかりで、何の助けにもなりません。

圍爐裡の周圍に暖とる家族の誰にも聲がありません。たゞ黙つて竦んで何れともなく襲ひ來る威壓に、チーツと耐へてゐるだけです。それでゐて耳はこそといふ音にも敏感に動くのです。「よほど積つたのだな」といふけはひが、外を見に行かないでも、身に迫る空氣

の壓力で十分に判ります。

「今夜は雪おろしせんでもいゝだらうか」

極小さい微かな聲で、さも天威を憚るやう祖母がいひます。

「さあ、まだ大丈夫だと思ふけど、昨日やつたところだから」

父も小さい聲でいひます。風が少々出て來たらしい。籜の笹に雪の流れる音がします。それも瞬くまにやんで、夜はまた一さう深い靜寂におちます。今夜はいくら降るのか判らない恐怖に、一家はおびえます。

かうした晩は年寄り子どもは眠るかも知れませんが、大人は絶対に眠れません。父も兄も養蠱以上に外装固くつゝんで、屋根の上に立たねばならぬのです。

もう隣近所は離れ小島のやうに分離されてしまつて、何の連絡もありません。「われのことばわれ」といふ孤獨な不安に、皆が俘虜となつて戦いてゐます。

翌くる日も夜がうす暗くあけたまゝ同じ調子でおして行きます。重い大きな綿雪が「どこにかうも澤山準備してあるのだらう」と思ふほど、或意味において、小氣味よく降りつ

どきます。空は最大限度に低く垂れて重い壓迫です。いつ止むとも想へません。

自分の家は大丈夫だと思ひますけれど、かうなると気が氣ではありません。屋根の雪を根氣よくおろさねばなりません。しまひには疲れ果て、たゞ屋根の上へのぼつてゐれば、氣がすむといふ形です。全く茫然自失。「天の意志のまゝに任すより外ない」といふ諦觀に、恐ろしく追ひ込まれます。だが、この諦觀がやつと言葉を生ませるのです。

「やあ、えらう降りますな」

隣の屋根への言葉です。隣といつても顔も容も見えるものではありません。たゞ土塊のやうな雪に粉まみれになつたものに言ふのです。

「やあ、降りますな」

向ふもつくねんと立つて言ひます。これ以上に言葉がないのです。

そのうちに風がおりて来て、樹々につもつた雪を吹き飛ばします。むろん屋根の雪も白い川のやうに跳ねて行きます。かうなればもう「家」は大丈夫でした。父も兄も屋根にゐては危険ですから、下におりなければなりません。一家は晴れ〜と胸なでおろします。そ

して大きく息づくのです。

「えらう降りましたな」

「降りましたな」

隣の主人との挨拶です。二人とも軒より高い雪の上にあることは無論です。

かうした悪天候が幾日かついた後に、その天候の表ともいひたい晴々した日がないことはありません。むろん幾日か降りつづいた後ですから、天地一白、白雪皚々で、田も畑も丘も川も池も一樣に埋められて、天地が數倍の廣さになつてゐます。そこへ太陽の眞新しい燦々たる光線が惜しげもなく照り注がれる光景は、壯觀といふよりも壯絶な感がします。數日の悒然も不安も一ぺんにけし飛んで、のう〜と背延びすることが出来ます。

「これあるが故に生きられるのだ」と、大きな呼吸を幾つかすることが出来ます。

かうした山・海・天候―郷土に、鍛へに鍛へられた私だち石川縣人が、生涯この郷土を背負つて歩き、どんな所に行きませうとも、忘られることはないと思ひます。成功すれば郷土をおもひ、失敗すれば更に郷土をおもひ、今までの苛烈だつた訶さいなみも却て懐しい思出

の種となつて、慰藉され激動され奮闘させられるのだと思ひます。そして私たちの性格もこの郷土的背景から生れ出るのでと思ひます。

更に、郷土の質量と内容として、その郷土の歴史があるのですが、これまた自然の景象に劣らない支配力があるものなのです。殊に郷土から輩出した偉人・傑士の傳記勳績など郷土の土として重要な位置を占めてゐるものだと思ひます。

その他、古蹟・戦跡・足跡、一として郷土の内容となり質量とならないものはありませぬ。それ等が偉大であればあるほど、郷土的・國家的意義が深ければ深いほど、永遠に私だちを慰藉し激動し奮闘させてくれます。一切の動力的源泉をそこに求めます。

その源泉の中核をなすものは、再び申しあげます。あなた方——「母」であることを。

「母」は郷土の神なのです。よく郷土の一切が失はれようとも、「母」だけは奪ふべからざる尊嚴として、私だちの世界に残るものと思ひます。「母」と共に存し、「母」と共に死するのが、この私だちに課せられたいみじき運命だと思ひます。

大東亞戦争の最前線に、幾多の固苦缺乏に堪へ、敢闘奮戦する將兵諸君が、残念にも敵

弾にたふれ、今はの瞬刻の際に、高らかに「天皇陛下」の萬歳を三唱して、天壽の彌榮と國運の隆昌を祝ぎながら、最後の一刻に「お母さん」とよぶ——何たるいみじき優なる心情でせう。涙なくしては到底この情景を描き得ないものだと思ひます。將兵だちは天をよび地をよびして、いとも朗かに神さりますのだと思ひます。

この一言は、「母」にとつて千萬事の現實的な孝養よりも、いや高く、嬉しい満足的なものでないかと思ひます。世の「母」だちはむしろさうした「子」だちに、感謝すべきではないのかと思ひます。それだけ「母」は「子ども」だちにとつて尊く、生命的なものなのです。世のお母さま方、切に自愛して頂きたいと思ひます。

こゝに、お母さま方の健康を祝福して擲筆します。左様なら、ご機嫌よう。

昭和十八年六月二十日 初版印刷
昭和十八年六月廿五日 初版發行

〔三、〇〇〇部〕

日本の家と母

定價貳圓五拾錢

特別行爲稅 八錢
相當額

著者 櫻井祐男

發行者 東京市神田區神保町三ノ二九

城戸 薰

東京市小石川區柳町二四番地

小泉輝章

東京市神田區神保町三ノ二九

第百書房

會員番號一一六一六四
振替東京七二四八四番

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

(出文協承認)
ア440152



965
125

書 科 學 著 者

書 の 族 民

升 味 蓼 子 著
萬 葉 思 慕

賣 價 二・九二
送 料 二〇

萬葉の代表的人物の歌とその心を描いて餘蘊なく、また、やまとを旅して、萬葉の眞髓に接觸する。得がたき書。

升 味 蓼 子 著

日 本 行 事 精 說

賣 價 二・五〇
送 料 一五

萬葉の心を心として、日本民族の祭を精緻に説きあかし、この心奥にふれし書。

文 部 省 推 薦
今 井 譽 次 郎 著

少 年 技 師 小 林 作 太 郎

賣 價 一・五〇
送 料 一五

發明の王、機械の先驅者を描く。

今 井 譽 次 郎 著

モ ー ト ル の 父 重 宗 芳 水

賣 價 一・八八
送 料 一五

日本の電機工業を今日の水準に高めた辛酔の生涯を描く。

書 四 き 高 り 香 も に 的 學 文

10